

---

# 俺の彼女は委員長です。

蒼雷

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の彼女は委員長です。

### 【ZPDF】

Z9050S

### 【作者名】

蒼雷

### 【あらすじ】

何の変哲も無い高校生の水村光輔。彼はとあることをきっかけに委員長の早乙女璃桜と付き合うこととなる。付き合つと言つても、そのきっかけとなつた言葉は「私の奴隸になれ」であつて……。委員長とその奴隸であつて彼氏でもある高校生による、学園系ドタバタラブコメ。

## 第一話 一人きりの状況は耐え難い

【第一話 一人きりの状況は耐え難い】

一年六組の委員長、早乙女璃桜。

その名を知らぬ者は一年六組の中ではいなくなってしまった。もしいたとすれば、それは耳が節穴になつてている奴だ、耳鼻科でも行って来れば良い。

入学式から次の日のホームルームで委員長に自ら立候補したのだから。しかも、見た目も凄い上玉。

これはそれから一週間と数日経つたある日のことである。

俺たちの高校は入学してからゴールデンウィークを挟んだら直ぐに運動会があるのだが、俺はその実行委員だったのだが、その時事件は起こつた。

踊る大×査線みたいな言い回しなのは気にしないで頂きたい。

「実行委員、委員長各一名、教室で待機……か、学級旗とハチマキの確認つて」

今日は友達とゲーセンでも行つて音ゲーをやるのと約束していたのに、女子の実行委員に残つて貰おうとお願いしに行こうとしたところ、陸上部に入れれば即戦力になれるような速さで逃げていった。そう言つて俺は教室で待機している訳。

「水村君、確認しに来る先生つてまだ来てないの？」  
「そうみたいですね、委員長」

俺に話しかけてきたのが委員長。高校生とは思えないほど大人びていて、声からスタイルまで、色んなものが普通の高校生とは違う。正直一週間の間で星の数ほどの男子に告白されたらしいが、その男子達は美しく散つていったらしい。

実際のことを言つと俺も好みのタイプなんだけど。

「ちょっとトイレでも行つて来ますかな」

「ええ、良いわよ」

俺はその時氣付かなかつた。偶然と偶然が重なつて最悪の状態であつたことを。

一いつの偶然が重なつていた。一つ、俺の足がスポーツバッグの肩紐に引っかかつていて。一つ、後ろから委員長が歩いてきていたこと。

まぜるな危険と書かれた薬品を混ぜてしまつたかのような状況になつていたのである。

立ち上がつた俺はそのままトイレに行こうとするのだが、スポーツバッグの肩紐が足にひつかつて転けることとなつた。

そのまま転ければ何でも無かつたのだが、委員長がいたことによつて悪夢が到来。避けようとした委員長は避けきれずに俺と一緒に転けちやつた、と言つこと。

「あやつー。」

「おひあつー。」

沈黙だけに支配された、音も無かつた教室に一人の声が響いたと思つと、壁に吸い込まれたかのように静かになつてしまつた。

その後なんて言つまでもなく分かり切つた展開になつてしまつけど、第三者から見ると俺が委員長を押し倒したようになつてゐるんだよね。

……どうするよ、コレ？ 何と言つ死亡フラグなんだろ？、ギャルゲーじゃないんだから。

俺が初めてプレイしたギャルゲーなんて、こんな最もらしい展開だつたような気がするんだが、それを俺が経験するなんて思いもしなかつた。

「……あつ、委員長、これは偶然なんだよー。」

「いや、分かつているんだけどね……」

委員長は俺から目を逸らしてゐる。無理もないな、こんな氣まずいことになつたんだから。

……いや、でも待てよ、先生が来るまで俺は此処にいる委員長と一緒に先生を待つことになるんだ。何と氣まずいことだ。ワ×ペースのゾ×とサ×ジが一人でいるときよりも氣まずい。

この場を切り抜けるのは火星からダーツをやつて点をゲットすること並の難しさに値する、どうにかせねば俺の命が危ないかもしけん。

「あの、外でも出て来ます」

「……」

委員長は受験戦争に敗北した受験生よりしく茫然と立ち尽くしていた。……マズイ、この場から緊急回避せねば。第六感が予感しているぞ。

そうなった俺はその場から猛ダッシュ。左に扉が見えてきたところで直角に左へとターン、車ではねられた時の勢いばかりの転がりを披露しながら外へと出た。

「ひとまず、俺の命は助かつたな」

何故か命が狙われていると仮定して話を進めているのだが、某高校生の妹がそんなに可愛いわけがないよりもそんな訳は無いのだ。ギャルゲーとかの展開って憧れるんだけど、実際に自分に降り掛かつてしまえば後悔の念だけが残る。

「さて、先生来ないかなあ……」

幸せそうに手を繋いでいるカップルを窓から俺はぼんやりと見ていた。

\*

先生が来てから直ぐに確認が終了し俺は夕焼けで茜色に染まった教室を直ぐに後にしようと決めた。

俺が作った空気とは言つてもラドンよりも重々しい嫌と言つぽどの空気なんだ、さつさと解放されねえかなあ。

「ちよつと待ちなさい、水村光輔」

「……はい」

ドスが僅かに聞いた声が俺を呼んでいた。

「今日のあの事件、忘れる訳無いわよね？」

いやいや、忘れる奴の方がいないと思つのですが。そんな奴は脳がツルツルなんじやないのか。

「責任……取つて貰うからね？」

「どうすれば良いんですか……？」

友達からの借金が返せなくて困っている中学生みたいな顔をして

俺は委員長を見た。

委員長は俺よりも背が低いのに俺を見下すかのように俺を見て  
いる。その日は高校生かと思えば裏では神様だと恐れられている高  
飛車な女子高生のようだった。

「私の……奴隸になりなさい、そして私に刃くして」

綺麗な薔薇には刺があるって言つて謠があるだい？  
それと一緒に。可愛い委員長には裏がある。

## 第一話 授業中に携帯は使つな

【第一話 授業中に携帯は使つな】

現在、俺の中ではまあ普通な教科の一つである理科基礎の授業中。最初の方はね、まあまあ分かるんだけど、後から吃驚するくらい凄く難しくなるんだよね。

ノートを取る気にもなれなかつたので先生にバレないよつに携帯をイジるうかなとでも考えているとポケットの中で小刻みに来る振動。

本文をおそるおそる確認。

『今日、お弁当作ってきたんだけど食べない?』

何と委員長からだつた。昨日の一件があつて俺の携帯にはアドレスと連絡先が入つてゐる。

昨日の一件を忘れようとする奴なんてな、失恋を経験した青年期の男子ばつの現実逃避をしようとしている奴だ。

しかし委員長も凄いな、自分が委員長だと言つたことを忘れて授業中にメールするなんて。自分から立候補しておいて自分の株を下げるようなことをするとは。何といつ緑渡りのような行いだよ。

『俺弁当持つてきてるんだけど、一ひとつなんて無理』

恋愛経験も無い、ウブな俺は仕方がないので実際のことを書かせて貰い、メールを返した。こういふのは普通、気を使って食べるべきだよね。

それが俺には出来ないから、この道を選んだんだけど、何か？

『私がソレ食べるから、私の弁当持つていないし』

……この女は流石だ。うちの高校は点数トップの人が入学式で宣誓を読むんだけど、それを読んだのが委員長だったという訳。

頭がいい人は発送の転換が強いと言つ話だけど、今日それを知つたよ。

しかし弁当フラグだとは、メジャーなフラグだな。話によれば高校の恋愛においての弁当フラグは $1 + 1$ の答えが $2$ になると言つことくらい分かり切つたフラグだと言つ。

『分かつたよ、取り敢えず昼休みソレ食べるよ』

とだけ書いてからメールを返した。

授業へと戻るうかと頭を切り換えたその時、目の前に先生が金剛力士像のよう立つていた。

「オイ水村、携帯没収な」

「……はい」

この先生、理科基礎の担当であり俺のクラスの担任の先生だったから良かつたんだけど、他の先生だったらどうなってたことか。しかも俺の目の前にいるから何か怖さ倍増なんだけど。

「しかし水村、お前は何で携帯使っていたんだ?」

「メールがきました」

「誰からだ?」

委員長です、と言いたかったところだけど、俺は言わない理由が一つあった。

一つ、委員長自身が鬼の形相で俺を見ていた。その鋭い視線はまるで槍でも投げているんじゃないかと言つほど痛かった。

さらにもう一つ、委員長のアドレスを何で知っているかと言つことになる、しかも俺は委員長の奴隸であり彼氏だ。彼女を売る訳にはダメだらう?

「親戚から何故か来てました」

「そうかそうか、まあ良い、放課後に科学室に取りに来いよ」

適当に嘘を付いてからこの話は終了。

俺は先生の持つていく携帯電話をドナドナみじく見送つていく羽目になってしまった。

\*

さて、待望の昼休み。

メールでの会話で委員長の言つからには先に屋上に上がって待つていろ、だそうだ。またまた屋上で昼飯を一緒に食うとはベタな展開だなあ。

「お待たせ、お弁当持つてきたよ」

委員長の声が聞こえてきた。俺の十五年間の人生でもこんなことは初めてだな。

中学校時代、彼女のいる奴にリア充リア充つて冷やかしたりしていたんだけど、まさか俺がこんなことになるとはビックリだな。立場が変わればどうなることやら、180。世界だつて変わるはずだぜ？

「あ、ちょっと待つて、はいコレ」

俺の手に丸い何かが渡された。何だろ？ な、と思いながら俺は手を見てみると、その丸い物体は何故か200円。ちょっと嫌な予感。奴隸だからって俺に飲み物か何か買いに行かせるつもりか。

「そりゃ、あんたの飲み物も買つても構わないからオレンジジュース買つてきて」

「はあ！？」

「あれ〜、私の奴隸になるって言つたわよね、あのこと広めてもいいのかな〜？」

「すいませんでした買つてきます！」

俺は弓矢のよつこ背筋をピーンと伸ばしたかのよつこして、海軍のよつに敬礼。こんなに従順に動いている俺がちょっと怖い。

その状態からロケットスタートを切つた某陸上選手にも引けをとらない速さで自販機のある二階まで階段を駆け下りた。

200円を自販機にぶち込んでオレンジジュースを一本買つと俺はそのスピードで屋上へと戻つた。

「買つてきました、ご主人様」

「ご苦労様」

何故かご主人様とまでちゃつかり言つてしまつ俺が情けない。中三の妹だつているのに何故に俺は奴隸にすらなつていいんだろつ。純粹な妹にここのことを知られたらどうなるだろうか。

俺に女子の友達がいた頃に家に連れてきたら『お兄ちゃん不潔つ！』つて涙目で呼ばれたんだよね。こんなこと言つておきながら純粹なのかどうか知らないが。

「はい、お弁当」

「じゃあこれが俺のな、多かつたひ皿ですよ」

「うひうひ可愛い女子って料理が壊滅的に下手ひじともあるじゃん。ら×すたに出でくるか×みとか、グレン×ガンのー×とかが具体例だな。

そんな感じでおそるおそる弁当を開けたんだけど、結構見た感じは……何かすつげえフツーですね、委員長さん。

ちよつと待てよ俺、味が壊滅的ひつひつ場合もあるじゃねえか、普通でも味はどうなんだよ。

おそるおそる、弁当の中に入っている野菜炒めを口へと運ぶ。そして、咀嚼。

「味だけど、どうがな?」

……普通に美味しいじゃないですか、委員長さん。家に一人くらには欲しいですね、メイドさんみたいな感じで。俺からすれば俺のご主人様ですけどね。

取り敢えず料理に関しては下手じゃなくて良かった。料理下手な女性が彼女に来るようであればそれはルーの入っていないカレーと同じようなものだ。

「委員長、美味しいよ、普通に」

「本当ー?」

「うん、本当に。めっちゃ美味しいんだけど」

「良かつたあ……」

安堵の表情を見せる委員長。俺もそれ見ていると和むんだけど、委員長の安堵の表情にはリラックスを促す効果でもあるんじゃないのかと思つほど和むな。

そんな時だつた。

「……あれ、水村君だよね、委員長と向しているの?」

「お弁当食べるよ?」

「マジー?」

何と詰つてどうだらうか、一年の女子三人組がこいつを見ているじゃないか。

これはダメだ、俺の命が危ない。言ふらすよくな真似をすれば俺の命が危ないぞ。一年生中の男子を敵に回してしまうこととなる。今すぐ誰か、愛の戦士マーラーを呼んでこい。『人の恋路を邪魔する奴は消え去れ』と詰つた言葉を吐きながらあの女子三人組を抹消してくれる筈だ。

「委員長、これはマズイな、逃げるぞ」

「ええ」

俺は箸を一、三口しか付けていない弁当を何処で学んだか分からぬような早業で片付けて逃げようとした。

しかし、時既に遅し。女子三人組は階段の所から消え去つっていた

のである。

「……見られちまつたか、ビリしそうか」

「仕方ないわね、あの人たちをテメノートに書くしか」

「そんなネタ何処で知つた！？」

これは[冗談では無いぞ、委員長。お前は良いにしても俺が一番やバインだ。告白して僕く桜のよつに散つていつた男子に恨みの念を買うこととなつてしまつ。

……さて、高校に入つてから俺は様々な不運な惨劇しか起こつていない気がするんだが。

## 第二話 目玉焼きは半熟の方が良い

【第三話 目玉焼きは半熟の方が良い】

俺と委員長が付き合っているのが皆にバレてしまいながらも俺は何とかゴールデンウィークへと逃げることが出来た。色んな奴からそのことについては結構聞かれたなあ。

マスコミに囮まれて色々なこと聞かれる芸能人の気持ちをよく知つたよ。

そんなこんなでこの連休、やることもないし俺は部活もしていいので仲の良い俺を含めた四人組で遊びに行こうかとでも計画していた。

両親は仕事で海外に行くみたいだし妹に関しては中学校の部活の合宿で家には居ない。

一人暮らしと同じ状況に俺はいると言つ訳なのだよ？

「一人でいるのって凄く自由だなあ、憧れるな

家でぼんやりといるだけだけど、何よりも親がいなくて自由だから頭のネジがボロボロと取れていくんだけよ、大学生の気持ちがよく分かる。

そんな自由な時間も俺が朝飯の目玉焼きとかをむしゃむしゃと食つていた時を境に崩れて行くこととなつた。

一本の電話をキャッチした俺の携帯がいきなり鳴り響いた。  
電話の主は勿論俺の『主人様』。こんな時に奴隸だからって呼ばなくとも結構でしょ。

「もしもし?」

「あー、光輔君? 私だよ、璃桜」

いやそんな分かるよ、声からしても分かるし電話帳登録してるから分かるよ。

「用件は何だよ?」

「光輔君の家って誰かいる? 両親とか妹さんとか」

「いねえよ、それでどうしたんだよ」

大体この話の流れからしてもつ何を言ひ出すかは分かるんだけど。

「遊びに行つても良い?」

ホラ来ました。何かのフラグが立ちましたよ、何だよ俺の人生がまるでギャルゲーと化している気がするのだが?

どう回答すれば良いんだろうかなー、困ったなー、家に女子が来るなんてマジで初めて。それで変な展開に進むなんて俺はゴメンなんだけど?

「ゴメン、無理だわ」

「……あ、そう、分かつたわ」

「うん、じゃあまあ連休明けにな」

そう言って電話を切ろうとした瞬間

、

「じゃあ、意地でも家を探して遊びに行くからね」

と残して電話の切れる音がした。

……怖つ！ 何！？ 浮気した夫を捜しに行く人妻みたいなことを言つて電話を切つたぞ！？ 何か俺の家に来たときにナイフとか持つてきそうなんだけど！？

て言うか委員長の声が凄く怖かつたんだけど！？ 火サスに出てくる女性の容疑者役の人の声と瓜二つだつたんだけど！？

「……いやいや、これはもう家から外に出れないかもしけねえな」

冷や汗でぐつしょりと濡れた背中の感触を気持ち悪く感じながら俺は固まつた田玉焼きの黄身を口に運んだ。つわあ、完璧に固まってるよ、不味い。

\*

晩飯も作るのが面倒だったので買い置きのチメンツーメンを美味しく頂いた俺はもう寝ようかなと思つていると玄関のインターホンが鳴り出した。

どうせ父さんがオークションで何か買つたんだろうと思つながら出でた。こしたが、思いがけない訪問者であった。

委員長だった。

「……はい？」

俺は本当に文字通り皿を丸くした。何故か水でも被つたかと叫うくらこづぶ濡れ。そう言えば夕立で雨が降つたけど、まさか……雨の中俺の家を探していたのか？

と言つたお前そんなことしてまで俺の家に遊びに来たいってどんな執念だよお前。

それ以前に両親とか心配しているんじゃないのか？

「風邪ひくや、聞きたいことまだあるけど取り敢えず中入れよ」「……」

委員長は何も言わなかつた。本当に抜け殻みたいに反応してくれねえ。田だつて本当に死んだ魚みたいに虚ろなんだけど。

「シャワー使えよ、体温めてここ」

「着替えとか……持つてないんだけど、どうしよう」

「妹のがあると思うから、取り敢えず今日はそれ使え」

口をよひかく開いてくれたんだけど、それが着替えの心配つてどうなのよ？ 色々と気を使つているのに着替えの心配つて心外なんだけど。

『お茶と「コーヒー」どっちが良い？』って聞いて『いや、それ以前に入れ物が嫌なんだけど』って言われると一緒に思ひだす。

委員長がよひやくシャワー浴びに行つたよひなので俺は安堵した。長かつたテストが終わつたときの安堵する感じと今の感じが似ているんだけど、この達成感みたいなのは何なんだろうか？

「……何で委員長來たんだうつ？」

それにしても一番気になるのはそのことしかない。他のことを一番気になることとして挙げる人がいるのであれば、ソイツには超一流の医者がいる脳外科を教えてやる。

親と喧嘩したから家出でもして來たのか？ いや、委員長はそんな喧嘩するような奴じや無かつたと思うぞ、親とは仲良さうだつ

たし。

いや、もうそんなの分かる訳も無いか。

どうせ考へても頭が痛くなるだけで仕方が無いので俺は考へるのを辞めて、茫漠とした時間を過ごすこととした。

「ふう、光輔君シャワー浴び終わったけど、妹さんの部屋って何処かな？」

「あ、説明しようが？」

「それとこっち向いたらダメよ、下着しか着てないからね」

な、なんだつてー！？

思春期の男子としてどうなっても良いので見てみたい気はするんだけど、説明しないと裸姿でいてもらひになるとるので俺は説明をしようとした。

が、残念なことに説明力の無い俺にとって口で妹の部屋を説明するのは難しいのであることに気付いた。ナンテコツタイ！

指でこう、方向を指しながら説明は出来るんだけど、困ったな、どうしようか。

「早く説明して、風邪ひいたやうでしょ」

一分かづたよ、俺が実際に案内するから」

— あつ —

何と言つゝだらうか、俺と委員長の田が呑つてしまつた。さら

に委員長の下着姿まで見てしまったと言ひ醜態。……まあ、それは良いんだけど。

よく雑誌で水着姿のモデルさんとかいふけどや、そのモデルさんにも引けをとらないスタイルで、某カジノディーラーみたいなスタイルだな。しかも偶然にも名前だつて同じ。

いや、ちょっと待てよ、コイツの脇腹の色が何か変だぞ？  
……  
何て言うか癌みたいだな？

「……」

すすり泣く声が聞こえかけたと思つて委員長の顔を見れば、ふるふると震えながら涙目になつてゐる。嫌な予感しかしないんだけど。そして委員長は近くにあつた俺のマグカップを手にとつて、

「いやああああーっ！」

と叫んで俺の「△」の丁度真ん中に、そのマグカップをダル×シシのようなフォームで投げてきた。……南無ニ。明日俺が目を覚ますよなことがあれば良いんだけどなあ。

血の生暖かい感触を感じながら「△」のカセットのトータのよつこ、俺の記憶は飛んでいくこととなつたのである。

## 第四話 女の買い物は長い

【第四話 女の買い物は長い】

今日は俺と委員長で、一人で近くのショッピングモールのイーメンに買い物に来ている。

委員長が機嫌を悪くしてしまったので、俺は太鼓持ち芸人のように機嫌を取る為に、こういう感じで買い物しに来たつて言う訳だな。昨日の下着姿を見てしまった為、決して混じることがない天国と地獄の双方が一気にやってきた。

「委員長、何か買いたい物とかあるか?」

「……」

三點リーダーは委員長のものである。何故だか、委員長が某アニメに出てくる宇宙人と化している気がするのは気のせいなんだろうな。唯一違う所はリストの類袋みたいにブーツと類を膨らまして拗ねている所だけ。

「何か買つてやるつか? そんな怒らなくても良いじゃねえかよ」

と、機嫌を取ろうとしたところ、蛇に口みをも凌ぐほどの目で睨

まれた。

これはＷＢＣ日本代表のキャッチャーでも取れないようなワイルドピッチを投げたような気がするな、委員長はそりや取れねえだろうよ。

「……」

「……」

結局気まずくなる。俺は結婚式のスピーチで新郎新婦の名前を間違えてしまつた新郎の友人みたいな顔をしながら、委員長から目を逸らした。

相変わらず俺の右からは委員長による痛い睨み。何だかボウガンを発射しているような睨みだ。

「」の雰囲気は思い出したくないあの日の出来事を彷彿とさせる。

「ねえ、光輔君」

重々しい空氣から声を開いた委員長。

その声は懐かしさが感じられるほど久しぶりに聞いた声だった。

「ゲーセン行かないかな？」

「まあ……うん、そりやあ構わないけど」

委員長がまさかのゲーセン行きたいです発言。お前、委員長にゲ

ーセンとか似合わねえな、毎にマスターでかけて食べるくらい似合わねえぞ。

と言うかゲーセンって言つたとしてもメダルゲームするか音ゲーするかだろ？

委員長何のゲームするんだよ？

「クレーンゲームがしたいのよ」

「……あれつてさ、凄くお金かかるんだけど？」

「それが嫌なら一回で商品を取れば良いんじゃないのかしら？」

「他人事ですか？」

この女は何てことを言いやがる。ゲーセン暦4年目にもなるこの俺がクレーンゲームでファイギュア取ろうとしたとき何円かかったと思つていやがる。

クレーンゲームつてコツが掴めたら簡単になるとか言つけどな、そのコツを掴むことはドラ×ヒ5において、は×れメタルを仲間にするほど難しいぞ。

ゲーセン暦何年だお前は。

「1年目だコノヤロー！」

「宇宙バカな侍みたいなノリで解答するの辞めましょうよー…？」

「まだ素人なのよ」

「と言うか俺は俺の心を読んだことに関しても驚きだよー」

ふと思つたが、さつきの雰囲気は何処へ去つていった。今の雰囲気は台風の中心がやつてきたみたいに不気味なんだけど。

「いつか、もしも今こののが台風の中心だったとしたら再び重々しい雰囲気来ちゃうよね？俺は、それだけが再び来なければ何でも良い。」

「クレーンゲームって言つても、何の商品が取りたいんだよ？」

「ソレ」

指差した先には色々な顔文字を小さく人形みたいにした物だった。確かに可愛いけど、委員長にこの辺の興味有るのか？

「可愛いくないかな？」

「まあそうだけど、やらないのか？」

「あんたにやつて欲しいんだけど」

「いやいや、やりたいうて言つたの委員長でしょーーー？」

言つてゐることと希望してゐることが矛盾してゐる。これが矛盾しないとでも言つてゐれば楚に矛と盾をひきぐ者がタイムマシンに乗つて抗議に来るぞ。

と言つてこの命令を了解しないと、今の状況は台風の中心からズレた所に行つてしまつた。

「仕方ないな、やつてやるよ」

「ありがとー」

何とも棒読みだな。素人の役者でもこんな棒読みはしないと言つ  
くらいいの棒読みだ。感情がこもつてすらいないんだから。

\*

……ついカツとなつたかどうかは知らないが、五分ほどで100  
0円使つてしまつた。  
結局それでも取れなかつた俺は委員長に冷ややかな目で見られな  
がら断念することとなつた。

「委員長、何か「ゴメン」

「……」

あの空気がカムバックしてきた。正直カムバックなんとして欲し  
くないモノが帰つてしまつたことが虚しすぎでどうしようも無  
いのである。

そんな嫌な雰囲氣に続いて、俺の恐れていたことが起きてしまつ  
た。

「……まさか、アレつて  
「どうしたの？」  
「いや、妹がいるんだよ、合宿の筈なのにな」

田線の先の女子らが着ているのは妹が着ていたので見覚えのあるジャージ、背中には妹の出身中学と部活が書かれている。

俺と委員長が付き合っていることがバレちまつたらどうなるだろうな、純粹な妹は飢えに耐えきれなくなつた猛獸のように発狂してしまうぜ。

さうに委員長も、俺の横で何か恐れていったことが起きてしまつているようだ。委員長は俺の横で餌を食べようとしている金魚みたいに口を開けている。

この様子から委員長に何か恐れていたことが起きたことを感づけない人は鈍いと言つことにしてやる。

「光輔君、逃げよう」

「はあ？」

「良いのよ、事情は後で話すから。妹さんだつているんでしょ？」

何だか、妹にバレたらどうしようも無くなると叫ぶ」と云ふ外は訳が解らないのだが。

俺たちはそう言つて、その場から逃げることとなつた。

## 第四話 女の買い物は長い（後書き）

初めまして、蒼雷です。

私は高校生な者ですから、更新速度は力メ並に遅くなります。  
申し訳御座いませんが、宜しくお願いします。

では。

## 第五話 異性の友達を家に呼ぶ時は両親や兄弟の居ない時に

【第五話 異性の友達を家に呼ぶ時は両親や兄弟の居ない時に】

本能的に危険を察知した俺たちは、気が付くと店の外の自販機で缶ジュースを買っていた。そのまま家に戻ることとなつたのである。取り敢えず委員長の危険を察知した理由を聞くことにしようつか。

「何で委員長、逃げることになつたんだよ？」

「妹さん達の近くにだけど、ピアスをした金髪の女性がいなかつたかな？」

「ああ、見たよ」

確かに見た。アレは怖そうだったな、本物の幽霊に出会した時の恐怖感にも劣らないほど怖さを俺はその時覚えたぞ。で、その人がどうしたんだよ、まさか親戚だとか？

「ええ、その通りだけど……あの人は私の義理の姉」

何という姉妹間のギャップだ。義理の姉とは言つても委員長のイメージだと才色兼備なお姉さんを想像するはずなのに、あんなチャラいって。

人は言つ筈だぜ、『兄弟は確かに一方が凄くて別の方が変ではあるが、その兄弟間のギャップの謎と言つるのは現代科学を持つてしても証明不可である』と。

でも何で義理の姉だよ？

「親戚なんだけどね、交通事故で両親が亡くなつたのよ  
「それで……委員長の家に来たつてこと？」  
「まあ そうなんだけど、何故か私とあの人は仲が悪くてね  
「色々大変だなあ」

成る程ね、これで謎が解けた。委員長が家に来た理由とか、委員長の脇腹の痣の理由。

お姉さんと仲が悪いってことは喧嘩とかもあるんだり。つい昨日になつて喧嘩してから家を出て来たつてことなんじやないのか？

痣のこととも関連付く。

お姉さんはきっと血の繋がつていない妹を羨ましく思つてるんじゃないのか？

俺には分かるよ、大体。

「家を出て来たのもその通り、喧嘩もしたのよ」  
「でも、付き合いだしてから家には来なかつたよね、アレはどうしたんだ？」  
「あのお姉さんは大学生で一人暮らしをしているから  
「ゴールデンウィークだから帰つてきた訳か」

でもわざわざ俺の家に来たつてこと、委員長がお姉さんに大してピザ屋のバイトでピザを届けに行つたりヤクザの家だった時と同じくらいの怖さがあるってことか。

さらに反抗するのはその家へとピザを届けに行くくらいの怖さがあるのだろう。

あの金髪のお姉さんだと喧嘩するにしても勝ち目はないだらう、RPGでストーリーを進ませる為によく見る負け戦闘と同じような状況だ。

「仲良くなりたいんだけどなあ……私に何がいけないんだろう」「大丈夫だつて、相談くらいならしてやるから

家庭の事情に首を突っ込むとかそういう話になるとモンスターペアレント、ぱりの親バカ改め彼女バカになるのだが、相談くらいで有れば構わないだらうか。

俺だつて一応でも何でも彼氏なんだから。

そんなこんな家に着いてしまつた所で、これからどうするか策を練ることとするか。

一つ、恐れることが無ければ良いんだが。

「ただいまー」  
「ああ、兄さんか、お帰りー」

……あ。天変地異とか隕石激突とかそういう感じのモノよりも  
つと怖い、俺の唯一恐れていたことが起きてしまったぞ。  
妹が帰つてきているだと！？

「何処行つてたの？」

「え、ちょっとコンビニでまあ昼飯でも買ひにかな？」

「どうしたの、声震えてるじゃん」

一階の階段から日焼けした華奢な身体が見えてきた。間違いなく  
ショッピングモールで見たジャージと同じだな、アレは妹だ。  
何故妹が帰つてきてやがる、合宿は？ この状況つて新手の詐欺  
か何かなのかな、俺を陥れようとするスパイの策略に違いあるまい。

「合宿は？」

「ああ、雨降つたからね、グラウンドが使えなくなつちやつた」

「へ、へえー」

忘れていた。妹はソフトボール部なんだけど、雨降つたら合宿も  
元も子もなくなつてしまつんだつた。昨日は雨降つてたな、委員長  
がズブ濡れだつた。

しかも残念なことに委員長が今、妹の服を借りている。これを知  
られたら地球崩壊どころの怒りでは治まらない展開になるぞ。

因みに噂だと、妹の中学校のソフトボール部はどういづか可愛  
い女子だけで、本当に体がボディービルダーよろしく鍛えられた  
女子なんて一人として存在しないらしい。

そんなおかげで妹は男子からも女子からもモテモテなんだって。

「昨日ねー、キャットチャーの練習やつてたらケガしちゃつてねー」

「あ、そうなの？ 病院とか行かなくて良いのか？」

妹は俺なんかよりも遙かに身体能力が高くて、その身体能力を買われてかショートとかセカンドとか色んなポジションを守っているのだ。

で、合宿で九つもあるポジションの中で一番難しいキャットチャーをやってみたと言つ訳なのか。

「まあ大丈夫でしょ、そんな損傷してな……」

階段を降りてきた妹は隠れようとしていた委員長の存在に気が付いたようである。と言うか委員長も隠れられるスペースなんて無いのだから隠れようとも出来なかつたのだが。

妹の顔を見てみるとネズミを見た某猫型ロボットのような顔をしながら顔色を他の色へとチエンジ。

その状況から昨日の委員長のよつて田に涙を浮かべて……

「兄さんなんて最低っ！」

俺の耳の穴を劈くかのようなソプラノシャウトをお見舞いした。

\*

「私は兄の光輔の妹になります、水村悠里」

「宣しくね、私は早乙女璃桜」

ソプラノシャウトから10分もしないうちに打ち解けた悠里と委員長。悠里は何にしても呑み込みが早いって言つたけど、いつもこれについても呑み込みが早いとは。

嫁と姑のような関係に等しかったのに今はもう仲良い姉妹のようになつてこゐるとは。

委員長も誤魔化すのが得意なのかどうか知らないが、転校した俺の幼なじみでこの街に帰つてくるから久しぶりに会いに来た、と言つて誤魔化したぞ。

「これで兄さんも彼女いない歴15年じゃなくなつたね」

「ほつとけ、うるせえよ」

「いや、でも一度女の子連れてきたつけ?」

「お前もイケメンの男子連れてきただろうがー。」

「こいつは不潔とか人に言つておきながら彼氏とかいるからして、

女子からも告白されるから酷い噂ではレズとか言われてこるらしい。  
週刊誌にでも取り上げられたら芸能界がひっくり返るようなスキ  
ヤンダルが発生するぞ。

まあでも妹にそんなことがあれば俺は一家族として反乱を起す  
だらう。

「先輩も来て居るんだし、これかわいがりするかな?」

「いや、先輩つて委員長のこと?」

「やうだよ?」

いや、ちよつと待て。委員長の名前が某ディーラーと被っている  
んだからお前が先輩とか呼び出したらデジっ娘のあの後輩になっち  
まうぞ。

別にお前が決めたのなら俺は止めようともしないのだが。

「さて、じゃあまた何処かへでも出かけや?」

「どうせソレしか無いよな?」

「やうどじょうね、行きましょつか」

どうせ出かけるといひも「」と並んでそんなに無いんだけどね。  
しかし、このことが思わず事態を引き込むことにならつとは俺こ  
も委員長こも知る由は無かつた。

## 第六話 姉妹は大切にしろ

【第六話 姉妹は大切にしろ】

「……で、結局はここに来ちゃうのか」「そんなの遊ぶと言つても遊べるようなところが此処しかないじゃないの」「いや、知るか」

悠里が遊びたいとか言つておきながら結局同じ所に来てしまったぞ。遊ぶところが一箇所とか毎日何かを食べ続けて飽きる感覚と同じになるぞ。

しかしある遊ぶ場所も此処しかないよな、俺も何人か友達と遊びに行くとしても此処くらいしか遊べる場所が無い。

「取り敢えず色々と回りますか先輩?」「私は光輔君と行ってくる場所があるから、一人で待つていってくれないかな?」「ええ、良いですよー」

それだけ聞くと、悠里は嫌いな奴が入院したと聞いたときに引けをとらない嬉しそうな表情で何処かへとともになく消えていった。でも委員長は俺と行くところがあるとか言つてたけど一体何する

んだろう？

俺は何も聞いていないぞ。

「説得しに行くから、横で見ていて欲しいの」

「……え、何？」

「いや、だからお姉さんを説得しに行くのよ」

「いきなりですね、藪から棒とか言つけど今の状況は藪から槍でも飛んできてるんじゃないのか？」

俺が横で説得を見ていて欲しいとか言つても、何をすれば良いんだよ。横でいるだけとか通訳の人よりも仕事少ないので。

通訳の人はなあ、意外と仕事がなさそうに見えていながら結構仕事をあるけど、俺の場合だと完全に仕事すらない上に野次馬と変わらんぞ。

「ちょっと待て、お姉さんに説得しに行くのは良いとしてもお姉さん何処にいるんだ、携帯で電話して此処まで呼ぶのか？」

「いや、あの人の行動パターンはド×ク工のラスボスくらい分かりやすいわよ？」

「何でそのゲームやつているのか不思議だし、色んなゲームに出てくるボスの行動パターンの解析つて結構難しいんだけど！？」

まあド×ク工♀は幅広い年齢層ゲットしたつて言つ話だけど、女子も結構やつっている人いるのかな？

それは良いとしてもラスボスの行動パターンと、お姉さんの行動

パターンの解析を軽々とやつてのけるとは何とも凄い、ゲームのレポート書かせたら10枚くらい仕上げてきそうだな。

「多分あの人は……本屋で立ち読みでもしていると思つ」

「何を根拠に？」

「基本的に休みはある人、ライトノベルとか色々立ち読みしているわよ？」

「ああ、そうなんだあー」

「何とも感情のなさそうな棒読みだらうか、俺の長い16年の生活の中でも三番目くらいに感情のこもっていない棒読みしたことだろう。

と言つたか自分の姉の行動パターンすら解析するとかそんな能力持つていてるのならスパイか何処かの機関の諜報部員くらいにでもなれるんじゃないのか。

「ここが本屋ね、向こうに居る人がそんなんじゃないかな？」

「確かにあの人はゲーセンで見たな、……委員長の言つ通りじゃねえか」

「最近のお気に入りは経済学で有名な本を読む高校野球のマネージャーの本だつて」

「古え！ て言つた言ひ回しが回つてどーー！」

俺もまあ中二の時に学校の図書室で借りて読んだけど。回つてどい言い方なのは作者が伏せ字使いすぎるのも悪いと思つたからしておこう。

ふと思つたけど意外と委員長のお姉さんまともだなあ。あの本つて髪の毛金髪の人が読む本なのかな！？

「あの人は根は眞面目だからね、髪を染めたのは大学から」「楽しそぎて髪の毛染めちゃつたのか？」

「やつでしうね」

大学生つて楽しすぎて骨抜きになつてしまつて眞実だつたのか。最高峰の大学の学生なんて頭は良いのに滅茶苦茶楽しそうな表情しているしなあ。

と言つたが楽しすぎて金髪に髪を染めるとか、晩ご飯がカレーだからと云つて喜び狂つ子どもと同じくらい楽しそうだなオイ。

「やつ言えば説得説得つて云つけど、何を説得するんだつけ？」「言い方悪かつたわね、仲良くしてくれない理由を聞くのよ」

ああ、成る程ね。最初からやつて云つてくれないと分からぬう。

と言つことを思つていたら委員長は既にお姉さんに声をかけようとしていた。……というか、既に声かけちゃつたよ！？

「ねえ、お姉さん」

「璃桜ちゃん、どうしたの？ 下らない用件は聞かないわよ」

「ちょっと話して欲しいことがあるんだけど」

「じゃあ早くしてよ？」

何かしゃべり方すら怖い気がするなあ。俺も悠里に冷たい態度取ることはあるけど、このお姉さんは氷点下の時よりも冷たいしゃべり方をしてやがる。

どうせ二重人格かもしれないぞ、基本的に家の中では酷いけれど学校とかになると打つて変わつて優しかつたりとかするのかな？

「何で言うか、相談なんだけど」

「此処でしなくても良いんじゃないの、家でしてくれないかな？」

「そんなこと言つなよアンタ、妹だらつ？　相談くらい聞いてやれ

」

何故だろうか、俺は今にも切れそうな輪ゴムが切れてしまつたかのように頭の中で何かが切れた。姉妹なんだから話くらい聞いてやるのがスジだろ？

姉妹間で当たり前のことが出来ないなんてそれは姉妹失格だと俺は思つぞ。

「……分かつたわよ、貴方が誰か分かりませんけど」

「私の彼氏よ、光輔君は」

「え？」

大胆にカミングアウトしているんじゃありませんよ委員長。そんなカミングアウトいらねえ、テレビの良いところで挟まれるCMくらいいらねえ。

そんなこんなで本屋から場所を変えた俺たちは本題へと入る「」。

「まあ光輔君の件は後で話してあげるわ、それ例の件」「

「ええ、簡潔に話してね」

「何で私にそんなに冷たい態度を取るの?」

「……」

「おお、お姉さん黙りこくってしまった。」この状況は氣まずすぎる。女子に手を出してしまった時の状況と同じくらい気まずいな。でもこの氣まずさと囁つのは種類が違う。何か聞かれて困る「」とを聞かれた気まずさと女子に手を出してしまったといつ気まずさは全然種類が違う。

「羨ましかったからかな、私はお母さんとお父さんとも血のつながりが……ね」

「血のつながりなんて別に良いの、私とお姉さんは姉妹なんだから」

もつともその通りだ、良いこと囁せざ委員長。この展開はドラマみたいなのが、こんな感じは初めて経験した気がする。何とも素晴らしい和解だつ。

「……うん、ありがとね」

「良かつたら、これから仲良くしてね」

「勿論だよ」

場所を変えたから周りには人がいなかつたけれど、泣くこともなく涙を堪えていたお姉さん。そして嬉しそうな表情をしている委員長。

俺はコレで良かつたんだろうな、と一人を見守っていた。

\*

『ゴールデンウィーク最後の日。』

お姉さんが帰ったと言つ報告が委員長から来たのだが、本当に気まずかつた仲は嘘のように良くなつたらしく委員長の親はそれを見て卒倒する程ビックリしたらしく。

何か色々と大変だつたなあと思つて『メールが一通。

『ゴールデンウィークも終わつたし、次は体育祭だね』

……あ、今度は体育祭か。委員長が来ていたおかげでその存在を忘れていた。

雨が降らないように一人でてるてる坊主でも作つてみることにするか。何とも古典的な神頼みなのだが、やらないよりマシだ。

『じゃあな璃桜、明日てるてる坊主でも作ろうぜ』

とメールを返した。メールって短くて分かりやすいのが良いんだって。そう言つて俺は味付けの薄い料理くらい淡白なメールをいつも書いているが。

ただこのメールで変わったことと言えば、『委員長』と呼ばずに『璃桜』と呼んでいることである。

まあ隠し味程度だな、この隠し味に璃桜は気付くだろうか。

「さてと、『メール』最後の日を満喫しますかな」

俺は携帯電話をポケットにスロットインして、部屋を後にした。

## 第六話 姉妹は大切にしろ（後書き）

どうも、蒼雷です。

あ、本編ですけど続きますよ？ 何か終わりっぽいけど次は体育祭ですかね！？

申し訳ございませんが、諸事情で色々と説得（？）の場面はスッと進ませて頂きました。

それにもこの話、悠里さん放置プレイですね、分かります（死ね

そう言う訳で次は体育祭編へ入ります。

それでは。

## 第七話 運動会のラジオ体操の存在意義は不明

【第七話 運動会のラジオ体操の存在意義は不明】

五月某日の翔鳳高校近隣の陸上競技場  
いや、何か大きな事件でも起こったかと言つくらいオーバーな始まり方だけど、体育祭があるだけでそんなに大きなことは無いぞ。  
そうそう、翔鳳高校って言うのは俺たちの高校の名前。近くには悠里の通う中学校もあるんだって。

しかしあま体育祭を陸上競技場で行つとかアメリカの農業ほど大規模だな、大して人が来る訳でもなさそうなのに。  
と言う訳で俺は今入場行進の為に入場ゲートで待機している。

『入場行進は1・1から始まって、トラックに沿つて進んだりトラックの内側へ向かつて下さい』

行進の順序だけど、簡単に言つと陸上のトラックがあつて、そこを行進して行つて、半周くらいしたらフィールド競技をトラックの内側に行くってことだろ？

委員長は前に行くんだけど、女子はプラカード、男子は学級旗を持つらしい。女子ついていつもプラカード持つけど何でだろ？、不变の真理なのか？

「ちょっと光輔、相談があるんだけど」「おひびひした」

俺に話しかけたのは男子委員長の神坂潤平。彼は男子委員長を決める時ジャンケンをして負け残ったと言つ疫病神に取り憑かれたかと言うほどアンラッキー・マンなのだ。  
しかしあ前委員長なんだから前行かなくて良いのかよ？

「いや、俺は陸上部だから用具の用意と片づけをやれって」

「……は？」

「そう言つ訳だ、お前実行委員だろ？ 幸せにな

「ちょっと待て」

幸せにな、ってどういうことだよ。何かもう璃桜と俺が結婚するみたいじゃねえか。まだキスもしてないのに光の速度よりも気が早いぞ。

とも言わないうちに潤平は逃げていくかのように去つていった。アイツ次に俺の所に来たらコロス。

さりに俺の手には学級旗を持たされていた。まあそんなこんなで俺は学級旗を持つての行進を余儀なくされたのである。

「全く、アイツって奴は」「え、光輔君が行進するの？」「そなんなど、聞いてくれよ璃桜、アイツったら陸上部だからって俺に大役押しつけて」

「まあまあ、頑張りつよ

その一言と共に、二口×二動画の動画ランキングの上位を狙えるくらいの微笑みを俺に見せてきた。

今の微笑みを世界に振りまくことが出来れば世界から戦争が消えるだろうな。

『では入場行進及び開会式を始めます』

と、アナウンスが流れてきた。俺らのクラスは1・6だから六番目に行進するのだが、何でもかんでも1・1からと並ぶのは可哀想だろ。

『ういう時は良いだろけど一度だけ先生の会では1・1担任の先生から意見をいうことになっていたんだけど、その先生が何でもかんでも1・1からは変だとキレたんだって。

それ以降翔鳳高校の先生の間で『いつもセオリー通りなのはダメだ理論』が確立されたらしいけど、そんな論理は円周率は3か3・14かと言う議論くらいどっちでも良い。

と、考えていると次は俺らの行進だ。

『クラス紹介、1・6』

そうだ、クラス紹介も入るんだつけ。確か璃桜が書いたとか言つていたな。

『私達1・6はいつも明るく、入学して直ぐぽぽぽんと友達が増えたクラスです』

公共×告機構のCMでおなじみのあのフレーズが何故に使われて居る……だと！？

ぽぽぽんと友達が増えたって不意に現れた訳じゃないよ、元々1・6として集まつたメンバーがそれぞれで友達を作っていたんだよーー？

『私達は体育祭に向けて一生懸命練習していました』

体育祭の練習の話を書いていないから練習の様子が分からねえだろーが。

つい最近までお前とお姉さんの仲直りをさせていた所だぞ、『以下は想像にお任せします』とか言い出すと見て頂いている方に対する放置プレイみたいじゃねーかよ。

失礼極まりない行為だな。

『これまでの成果を生かして優勝をつかみ取りたいと思います』

つかみ取りたいとか何か怖え。ホラー映画とかでゾンビが主人公の首を掴んでから空中に持ち上げる場面を思い出したんだけど。優勝も同様にしてつかみ取るとか嫌なんだけど。

『どうぞ、応援を宜しくお願ひします』

最後はまあ……普通に真面目だな。

流石に最後までもクラス紹介が天然ボケの人ぱりのブツ飛びを見せているとダメだろうよ。

\*

さて、開会式スタート。やつをアナウンスで『では今から開会式を始めます』だって。

開会式って言つてもどうせ校長の挨拶とか聞いて終わり……じゃないのか？ どうせ校長の話だから長いはずだろうよ。

溜息を吐いてちょっと横を向いてみると、校長が話しだした。

「皆が楽しみにしていた体育祭が今からスタートします、頑張つて下さい、以上です！」

校長の話短つ！ 普通はここは長々と話するよね、何処かのよく居そうなジジイみたいに同じような話を延々としたりとかしないのか？

俺らの高校の校長は話が短いことで有名とか一度も聞いたことない

いぞ。

『ではプログラム一番、ラジオ体操を始めます』

……いつも思うんだけど、このラジオ体操って必要なのか?  
と思つていると恒例のあの音楽と『背伸びの運動から~』と言つ  
お馴染みの声が流れてきた。

「なあ璃桜、ラジオ体操って必要なのかな?」

「知らないけど、ストレッチとかになるんじゃないの?」

「成る程ね、確かに」

「スポーツする為にストレッチは必要だもの」

璃桜ですら知らないこのラジオ体操の存在意義。不思議で不思議  
で仕方が無いのだが、それはどうしても知りたい訳でも無いのでス  
ルーしよう。

どうしても知りたい人はググつてみてはいががな物でしょうか。

それについてもラジオ体操の話は一部プログラムで確認した人以外  
は知らなかつたようで、この音楽を聴いて度肝を抜かれた人も何人  
かはいる。

後ろでは男子共はナマケモノみたいなラジオ体操をしている奴も  
いるぜ。

「次のプログラムつて何だっけ?」

「障害物リレーよ、私も光輔君も出るじゃない」

「あ、そうだつたつけ」

「因みにこの障害物リレー、A×B48がテレビでやつてるようなことをするりしこよ」

……璃桜、それは笑い事じゃない。

あの人たちは48人くらいもいながら臨時テレビで粉まみれにされたりコスプレしたり大変なんだぞ、障害物リレーもきっと大波乱になるだ。

と思つていて『では、のびのびと深呼吸～』と言つ声のトーンを高くした陽気なオッサンの声が聞こえてくる。ラジオ体操も終わりの予感。

さて、次の障害物リレー、俺と璃桜はどんな酷い目に遭つことだらうか。

ラジオ体操をしながら怯える俺は不安を予知していた。

## 第八話 障害物競走と人生は相似

【第八話 障害物競走と人生は相似】

『ではプログラム一番、障害物リレーに出る人は第四ゲートに集合して下さい』

来ちゃつたよ、白昼夢と呼ぶべき体育祭史上最高峰の悪夢の競技が。

しかもこの障害物リレー、俺たちがすることが明かされていないので右も左も分からぬどじろでなく上も下もさえ分からないのである。

先輩が言うには「『一ラ買つてきてと頼まれた人がレタスを買つてくるくらいブツ飛んだ』ことをやらされる」とのこと。

聞けばこの障害物リレー、プログラム三番男女混合ハードルリーと選択だつたらしくて一年と二年は全クラスハードルリレーを選んだらしいぞ。

と言う訳で来年からはこの障害物リレーは大幅に改変されるらしい。

「ではクラスの点呼取ります、1・2と1・5と1・6はいますか」

しかも生徒会の人から明かされた真実では出場クラスは三クラスだけ。普通はそれだけしか集まらなければ中止とかそんなのにするだろうよ。

と言うか今年までこの競技が残っていた理由が分からぬのだが。この競技の生存の理由と恐竜の絶滅の理由の解析であれば前者の方が難しいと思うぞ。

「では、競技の説明を始めます」

此処は長々しく述べるので俺が説明することじよつか。感想は後ほど。

まず男子が先に走つて、その後に女子が走ると云つのが大きなルール。反則は勿論ナシ。

第一走、ぐるぐるバットで10回回つて妨害のある平均台を渡つて、第二走は借り物競走。

第三走、男子は100mを一輪車で爆走してからパン食い競争をしてから女子にバトンパスし、女子は飴食いをしてから200mを爆走。

第四走であるアンカー、男子は炭酸一気飲みをする間に女子が早着替えをして、そのまま一人三脚をして、ゴールだつて。

……まあ各走者のすることの感想を云つと、第一走は完璧にウケ狙いですね、分かります。第一走は凄く楽っぽく思えてくるのは何故だ。

第三走の女子の飴食いは顔が真っ白になるんだぞ、そういうのも配慮しろ、生徒会。顔真っ白になると江戸時代の拷問よりも酷いぞ。

そしてアンカーに関しては俺が出るんだから命が危ない。

「よくこんな種田でOK通ったな……」

「この種田を考える生徒会も確かにドSの集まりだけど、先生もこんなのにOKを出す点を考えてみれば俺はこの高校に来るべきじゃなかつた。

まさかこの学校は、世界有数のドSを集めているが一流大学への進学を約束されると言つ懲りしい高校なのかもしれん。

生徒会がドSと言つ時点でどつかしている上に先生もこんなのじやマジでどうにかしてやがる。

内部からこの学校を潰そうと計画が発足しているとも言つのだらうか。

「光輔君、私と男子が二人三脚だよ」

「……いや、その男子とやらは俺なんだけどさ」

「えつ！？」

一人三脚してからゴールとか本当にシャレにならん。結婚への道のりをこうやってアホみたいな障害物リレーでカッフルを使って再現しないで欲しい。

どこかのテレビの再現VTRでも絶対に見られない物を俺らで再現するなんて無理。

さらに観客席にいる一年生の男子の皆様方が日比谷焼き討ち事件にも引けをとらないような暴動を起こすはずだらう。

野生の本能と言つのは怖い物で、人間が限界を超えるようなことがあればそれが引き出されるのだが今日正しくそれが起きようともしているとは。

「何だか恐ろしそうなんだけど、他の男子達が」

「そんなの気にしなくて良いんだよ、どうせ光輔君に嫉妬しているだけだしね」

「で、璃桜は大丈夫なのか?」

「普通に大丈夫だよ」

……大丈夫なのは良いのだがちょっと哀しいものがあるのは気のせいなのだろうか。

薄々気付いていたが、俺がモテないことなんて。認めたくなかっただけなんだよ、真実を受け止められずに現実を逃避していただけなんだよ！

非を受け止めるなんてことは無防備に爆炎の中に飛び込んでみて無傷で帰つてくることくらい難しい訳では無いが、心をピストルで打ち抜かれるような何かがある。

どうでも良いが、最近俺は高校で話しているのは中学から仲の良い男子と中高含め仲の良い女子と、ほんの一部の高校からの男子の友達。

しかしもう男子に限らずリア充じゃない女子も俺を空腹に飢えたライオンが肉を見るような目で見てくるのは気のせいなのか？

「さて、じゃあ頑張ろうか、障害物リレー」

「うん」

まさに俺の田の前に白昼夢が見えかけていたのである。

\*

「では位置について、ヨーリドンフー・

生徒会の女子の号令と共に、始まりを告げるピストルが空へ耳の  
劈けるような轟音を響かせた。

第一走の男子はバットを取ったかと思うと独楽が回っている状況  
を彷彿とさせる回り方でぐるぐるバットを行っている。  
このぐるぐるバットは10回ほど回るのが、意外と10回回るのはキツイのである。

現在の回り終えた男子の状況を見れば分かると思うのだが、何処  
に目がついているんだとツツコミを入れたくなるほどフラフラにな  
つていてる。

この時点では観客席ではお笑い芸人のライブの観客席に引けをとら  
ないくらいの笑いが起きている。

「何で観客席笑つて居るんだろう?」

「多分男子がフラフラだからじゃないからかな?」

現在トップの男子がフラフラなまま平均台に差し掛けた。

妨害が入るんだけど、その妨害とやらは生徒会が行う上に、何処から借りてきたか分からぬ、ボールを入れると弾丸の如く発射させるマシンを使うようだ。

本格的に「ゴールデン」に放映されるバラエティ番組にも引けを取らない種目だ。

しかもそのボールが人にぶつかった時の音が本当にリアルに痛そうなんだよね。

そんな状況もお構いなしに楽しむ、ドSな生徒会の人たちに俺は目をやることとする。

「ふははー！ 悶え苦しむが良いわー！」

「」愁傷様です、あなた方には何の罪も無いでしきづが

俺はこの言葉を聞いてこの学校に来るべき人間でなかつたことを俺は確信した。

前者のセリフを叫んだ人はまだ冗談に聞こえるので良いとするのだが、後者のセリフを叫んだ人なんて無表情で言った上に微妙に悪魔の笑いを浮かべてやがる。

何故か男子はボールが当たると「む……無念！」とか「ア、アツ、アツー！ 痛え！」とかシャウトしている始末。

痛みに悶えながら平均台を渡り、先陣を切つたのは1 - 2。

ボールの当たつたところが真つ赤になつているんだけどそれが水玉模様みたいでお洒落だなあ、なんて言つてゐるような余裕はない。女子にバトンパスするけど、女子も男子と同じような結果になる

だろう。

「見るに耐えないのは俺だけかな?」

「と言づか、先生方は何で生徒会を叱りつけたりしなんだろうね?」

「そうだよな

と言づく会話をしている間に女子が競技を行つていたが結果は俺の予測通りだつた。

特に女子は本当に男子に比べてダメージの蓄積が大きいのか、中には涙目になりながら平均台を渡りきる女子もいたほどなのだ。そして第一走へとバトンパスを果たすのみである。

第一走は一番楽な借り物競走だが今までの状況と先輩の言葉を考えてみれば、どうの巣窟と化した生徒会がまともな借り物競走を行う訳がない。

おっと、1・2の男子が借り物を書いた紙を拾つたっぽいぞ。

「すいません、英語の出来る方いますかーー!?

何を叫びだしたかと思えば英語の出来る人。借り物でそんなのを借りれる筈が無いだろう。

となれば、まさか……!?

「あれ、借りてくる物が英語で書かれて居るんじゃないのかー!?

中学校の模試とかで見たこともあるだらうけど、上に問題文で『次の文が記す物を持つてこい』と書いていて借りてくれる物に関する情報が数文書かれていたりするんだろう。

何とも陰気な嫌がらせを考えるな、この嫌がらせは嫌いな奴の机の中にはかみ終わったガムを入れておく嫌がらせと何ら遜色無いぞ。この種目は障害物リレーとかじゃなくて嫌がらせリレーと言つべきだらう。

「すいません、可愛い方いますかー！？」「何を借りよ」とせとんじゃああああつー

うつかり大声でツツ「コミ入れてしまつた。もうちょっとホラ、生徒会の人もオブラーートに包んで言つてやれよ。まずそんなの自分から名乗り出る人いない上に、生徒会の人だって好みがあるから何処までが可愛いのかと言つのは人それぞれだろう。

さて、最後の走者の借り物は何だらうか。

「誰か150円貸して下さい。」

もう大体予想はついたよ、『500円のコーラ』とかそんなのだろう、既に借り物じゃなくてパシリになつちまつてゐるぞ。波乱の障害物リレー、後半に続く。

## 第九話 炭酸一気飲みすると喉腫れるぞ

【第九話 炭酸一気飲みすると喉腫れるぞ】

さて、今は第一走の借り物競走が終了。

男子の方は意外とすんなりと終わったりもしたんだけども、女子の方の借り物は男子よりもマッハ三の速度よりもブツ飛んでいたのである。

その借り物は『キム×クばりのイケメン』と『最近告白した人』と『今まで付き合ったことのある人全員』などと言つ無理難題。

化学の元素記号の表の穴埋め問題よりも難しいと言つても過言ではない難しいこの問題を何とか終えた三クラスは第三走へとバトンタッチをした。

「今のトップは1-5か、俺らは逆転出来るのか?」

続いての競技は男子が一輪車で、女子が飴食い改め拷問。この障害物リレーは波乱とかそんな部類じゃなくてタイダルウェーブくらい荒れている。

一輪車は小さい頃練習したけれど乗れなかつたと言う人が多かった。うつけど、実際に俺のクラスでもそんな人が多かつた。

練習の段階で普通に乗つてみても飛び込みの水泳選手のよつに口

ヶてしまつて終わりと言つ状況が勃発したのである。

この一輪車だけど、先程アナウンスで『乗れない人は逆立ちで100m歩くのもOKとします』だつて。

「身の回りに一輪車に乗れる人いた?」

「わたしは中学校の時にいたわよ、一人だけ」

「やっぱり乗れる人つているんだな、俺は一度も見たこと無いよ」

中学校の時にサークルの中継をテレビでやつていてピエロの人気が  
ジヤグリングしながら一輪車に乗つていたのは覚えている。

その時に軽々と一輪車を乗りこなすピエロを俺はガラパゴス諸島  
に生息している絶滅危惧種みたいな目で見ていたのも覚えている。

しかし今、男子らが苦労して乗つているのを俺らは爆笑しながら  
見ているのだが。

「一輪車つて中々乗れるようになるの難しいんだよね?」

「そうだよ、バランスとか必要だし」

「璃桜は乗れるのか?」

「幼稚園の時は乗れていたけど、もう乗れなくなっちゃつた」

そんな談話をしている中、一輪車に遊ばれている男子らは30m  
ほど進んだ所でそのままコンクリートのトラックにダイブしてしま  
つたり逆立ちを始めたりしている。

観客席を見てみると腹筋が裂けるほど笑つている一、三年生の皆  
様と見るに耐えないと言いたそつに背を向けている数十人。

「ケたせいで流血シーンも含まれてR-18指定を受けてもおかしくないほどのリレーになつてきているが、この障害物リレーは末だに続く。」

「競技の中止とか無いのか？」

「いや、特に無いって言つてたけど」

「どうせ終わるのが早いからコレで時間稼ぎでもしているんだろうか？」

「うん、生徒会の人もそんな感じの素振りを見せていた」

ドリの集まりのくせに計算高いな生徒会。内部から学校を潰す為に戦略を考えるのが得意な輩を雇つてこいつやつて投げやりな体育祭でも行つてるんだろうか？

一分くらい経つてからようやく一人の男子が100m一輪車で走り終えたである。

しかしあま、10点満点を貰えるようなダイブをトラックに決めた男子だったので、その時に負傷して出て来た鼻血に悶えていた。

一つ俺が言えることと言えば、第三走じやなくて良かつた。

その後のパン食い競争だが、流血に悶える男子どもは海老の背中を180°。曲げたかのようなジャンプを披露したり手を使いそうになつたりと再び悶絶している。

「ようやく女子にバトンタッチか  
「次私達だよ、用意しないと」

俺らはトラックに出てから第二走女子の走りを見物することにする。

さて、拷問の時間だ。……いや別に俺は拷問を行う牢獄の番人とかそんなのじゃなくて、適当に言ってみただけだ。

ただしこの飴食いこと拷問は可愛い女子を可愛くなく見せると言う恐ろしい錯覚を起こすのだ。

案の定バトンタッチをしてしまった女子達は知恵の樹に生えた果実を食べるかどうか迷っているイヴのように飴食いを行うかどうか躊躇っている。

結局は競技の進行を考えて行う訳なんだけど。

この飴食いは言い忘れていたが、ダミーのマシュマロも入っているから完璧に飴を当てるまで先には進めないのである。

勿論、当てなかつたら反則負け。女子の生徒会の人が検証するんだつてや。

「もう俺らがダメだつたらアレだな、此処の反則に賭けよつぜ」

「そうね」

何て笑つてゐるうちに1・2がどこかのクラスが飴を当てたつぽくてバトンを持って走り出した。うわあ、顔は雪にも引けを取らないくらい真っ白。

その後、その他の一クラスも飴を当てたのか走り出した。

しかしその顔は真っ白にも真っ赤にもなつていて苺大福を彷彿とさせる色をしている。

何か恥辱のあまり、走りながら涙している女子もいたりとか、下

を向いて走っている女子とかいたりもしている。

『見ないで下さい！』とか『もう私お嫁に行けない！』とか叫んでいる。

「さて、バトンが回ってきたか

涙目になっている女子からバトンが渡されたので俺と璃桜は田の前にあるテーブルへ手をかけた。

璃桜は体操服の上から服を着れば良いだけなのだが、俺は炭酸を完璧に飲みきる必要があるので放送禁止の状況にならないことだけを願う。

「頑張ってね、光輔君」

「おう、璃桜も早く着替えろよ」

先程の借り物競走で買つてきたと思われるコーラ500mlを手にとつて、俺はフリースローを打とうとしているバスケの選手のような表情を浮かべた。

振つて炭酸抜きたいんだけど、それをすれば反則になるとのこと。しかもペットボトルから溢れ出たら予備を出されるんだって。

覚悟を決めた俺はグッとコーラを口に含んだ。

この時点では炭酸が口の中で俺の皮膚へとアクメリオンばかりの無限のパンチをお見舞いしている。

そのまま喉へと押し込んでいくんだけど、喉にも炭酸はパンチをしながら進んでいき、俺の口の中がスパークリングしてやがる。

確かに一気飲みだから一度口を離したらアウトだった気がするぞ。畜生、生徒会の奴らはどんなサディスティックな楽しみ方をしているんだ。A × Bよりも酷いことをせられているんじゃねえの。と考えていると1・5が飲み終わつたっぽい。

『おつと、1・5が飲み終わったようです』

稀にアップされている腹の立つ「口 × 動画の実況くらいウザいアナウンスが聞こえてきた。

喉が限界に達したところで500mlのコーラがなくなり、黒色の呪縛から俺は解放されたのだが、今の気持ちを言つと、とにかく喉がヤバイ。

「喉がつ！ 喉があつ！ 喉があああつ！」

正しくは『目がつ！ 目があつ！ 目があああつ！』だが、そんなのどうでも良い。喉が腫れたなど涙目になつてると、璃桜の方が着替えを済ませたっぽい。

しかし今の俺は再起不能。再起するまでには喉の腫れを治す為の何かが必要だ。

「光輔君、あとちょっと頑張ろつ、ゴールはあと少しだから

「……あ、ああ

声にならない声で囁くと俺は璃桜を見た。

……ただ、その格好が何故かメイドさんのは気のせいなのだろうか？ 俺は炭酸の水圧に制されて脳をハイジャックされてしまったのだろうか？

それとも此処は天国なのか？

立ち上がりつてみれば他のクラスの女子一人は巫女さんと何処かのアイドルと化していた。

もう早着替えとかじゃなくて……コスプレ、だよな？ 誰の趣向？

「さて、行こうか」

二人三脚の紐をグッと結んで歩き出す俺たち。

観客席をチラツと見てみると凄いオーラが業火のように出ているのが分かるのだが、それが男子と一部の女子から出ているのだ。

この嫉妬のオーラは何処かの悪霊の怨念のように強いモノを持っているのも見て分かる上に、何かの祟りを引き起こすに違いないと言ふのも分かる。

しかし観客視点だと俺とメイドさんが一人三脚していくってどんなシユールな光景だよ。

何処のメイド喫茶に行つても受けられないサービスじゃないんだから。

「前にもう一クラスいるけど、璃桜、勝ちたいよな？」  
「うん、負けるのは嫌」

と、ここに辺の話はアニメみたいな映像の方が解りやすいけど文  
章化すると分かり難いと言うことで申し訳ありませんが結論だけ話  
させて頂こう。

1 - 2、1 - 5、1 - 6の三クラスとも競っていたけどもほぼ同  
時にゴール。

生徒会の人たちはどのクラスが優勝なのか決められないのか、周りの  
生徒会の人助けを呼んでいる。

『三クラスがゴールしました』

このリレーだけど、どのクラスが優勝してもおかしくないような  
状況に置かれている。

生徒会の人たちは企業が新しい商品のデザインの考案を話し合っ  
ているかのように、優勝クラスがどのクラスなのかを話し合つてい  
た。

が、それも終わつたようでアナウンスが入つてきた。

『優勝クラスは1 - 6です』

一応、1 - 6の席の方からは歓喜の声が聞こえていたのに俺はち  
ょつと驚いた。

そして横では委員長はメイド様のかとツッコミを入れたくなる  
ような璃桜が、天使のような笑みを浮かべて勝利を喜んでいた。

## 第十話 恋愛において努力しない奴にチャンスは来ない

【第十話 恋愛において努力しない奴にチャンスは来ない】

現在、プログラム一番が終わってから観客席のスタンドへと戻ろうとしている所。

俺はメイド服を生徒会の人に返そつとメイドカチューシャを外している璃桜を、勝利の女神に勝ちを乞つ時のような目で見ていた。哀しいのだが璃桜のメイド姿を見るのはこれで最初で最後か。

「さてと、スタンドに戻ろう」

「そうだな」

俺は未だに痛みを引きずつている喉の奥からいつも通りの声を捻り出して答えた。炭酸がこれほど痛さを持つているとは思わなかつたぞ。

決心したよ、俺が生徒会に入つたら全世界の生物を敵にしても今日のような障害物リレーを翔鳳高校体育祭のプログラムから抹消してやる。

でも生徒会入るつもり無いけどな。

ただ、この障害物リレーに感謝すべき」とは璃桜のメイド服姿を挾めたことだな。

これが無かつたので有れば俺は生徒会にテロを起こしていたかも

しれない。

「勝つちやつたね、なんだかんだで」

「まあな

本当になんだからんだってつべつだな。

「途中結果は昼休みに発表だっけ?」

「そういじこな

毎年のことじこが勝利なんて三年生が根剛を持つて行つてしまふんだから別に俺は構わないけど、ちょっとくじらこは勝ちたいのでもう気になる。

生徒会の待機室で点数は厳重にセキュリティされてるので俺らみたいな奴がネズミ小僧よろしく生徒会の待機室へ行こうとも見ることはできなこや。

「他の競技でも見ようか、楽しみだね

「特に見物なのは午後の部だっけ?」

「そうだよ、でも午前の部も結構面白このあるじこよ

いや、それはさつきの俺たちが出た、社会的抹殺を可能にすると言つても過言ではないような史上最悪のリレーのことだぞ。

午前のプログラムと言えばほとんどのリレーである。

他のと言えば繩引きとか騎馬戦とかくらいしかないぞ。  
まあ騎馬戦は色々と白熱しそうなんだけど、繩引きとか見ていて  
地味～なだけじゃねえの？

「取り敢えずスタンンド戻ろつよ」

「そうするか」

とか言いつつも俺らは1・6の応援席に戻ってきた。

祝福ムードは感じられるんだけど、左側に固まっている男子の大半からは殺氣や嫉妬を材料としたぞ黒いオーラが感じられるぞ。  
昼休みの展開が二流のドラマへりこまる分かりなんだけど。

「お疲れ様、あの障害物リレーは大変だったよね」

「俺たちに優勝を有り難う！」

「賽は投げられたー！」

何か感謝の言葉の中でアホらしい言葉をほざいている人が居るのは気に入るな。きっとこれから勝負もこの調子で戦おうってことだろ。

俺は次の競技でも見よつかと応援席に腰をかけた。

隣には中学校から仲の良かつた友達の城崎がいるので孤立はしないで良いのだが、まあそういう関係のトークにならないことを願つておこうか。

「障害物リレーってあんなことするんだな、俺初めて見たよ」

「先輩から俺は聞いてたぞ?」

「へえ、出ようかと思つていたけど出なくて良かつたな」

他人事みたいに流すなんて畜生、羨ましいぞ。

俺なんて喉に大ダメージを負つて帰つてただけだからな。何か楽しそうつて言つノリがこんな事態を巻き起こすなんて鯛で海老を釣る感じだよ。

騎馬戦とかにしておけば良かつた。

「今ハーダルリレーやつてるけど、結構面白いよ」

「ぶつちやけ佑斗は何処が面白いと思つ?」

「いや、ジャンプとか」

取り敢えず言つておこひ、佑斗つて言つのは城崎の名前である。それにしてもハーダルを跳ぶときのジャンプは綺麗な人とそうでない人のジャンプの出来具合が全然違うのである。

綺麗な人は本当に世界陸上で見るようなジャンプなんだけど、汚い人と言えばマ×オジャンプばりのジャンプかそれ以下のジャンプをしている。

ハードルにあたつてコケるような輩はいないものか。当たると物凄く痛んだよね、陸上部の潤平から聞いたんだけど凄く痛いらしいぞ。

「四番田のプログラムって何?」  
「騎馬戦だったかな?」

「さなり騎馬戦だつてよ。」

「まあやつくり観戦しようよ  
「やつするか」

午前の部で出るよつた競技はもつ無こので俺はまんやつと観る  
とこした。

\*

『では、これから暫休みとします。中間順位の発表は第一ゲートの  
前で行います』

途中結果は放送で知らせるんじやなくて開示するんだな。

「光輔君、途中結果見に行いつよ  
「ちょっと待つて、何か飲むもの置つてくるから」  
「良いよ、早めにお願いね」

俺は席を立つて近くの自販機へと歩いていった。

実際、先生から自販機の使用はNG出でるんだけど話はそんなことを言つのはナルシストの耳に『キモイ』の言葉を浴びせるの一緒で、皆は普通に自販機使つているのだ。

しかも今スタンドで女子とか携帯使つてゐるしなあ。

とにかく先生がいないからつて皆が皆、羽を伸ばしそぎて居る。先生がいないからそんなことやつちやつて良いんですかって言つたいけど、俺もその一人。

まあ終わりよければ全て良いんだよ。

「ターゲット見つけました」

「よし、急所を狙え」

と言つ声が聞こえて來た。……どう考へても、狙われてゐるのは俺だよな？

本当に最近物騒なんだよね、色々恐ろしい事件もあるんだしなあ。俺も翌日の朝にめ×ましテレビとかで『翔鳳高校一年水村君が……』とか報道されないようにしないと。

なんて言つてゐる暇はねえ！

「お前らまた俺を狙いに來たのか！」  
「いかにも」  
「そんなに璃桜のことが好きか！ どこのスター カーだよ！」  
「その為に貴様を殺さうとしているのだよ？」

「 まず努力しろー。俺から奪い取るとかそういう努力を重ねるやー。」

背後を振り向いてみると2、3人だろうと思つていたけど何か…  
…凄くいるんだよね、アリの行列と同じくらいの男子が。  
どうせ一年だろうから気にしないけど。

「俺たちは『忌々しき水村を討つ組織』だ！」

「ネーミングセンス悪いぞ！？」

「分かりやすい方が良いだろ！ ネーミングセンスがなんぼのもん  
じやい！」

「正論だー。何気なく正論だー。」

俺一人に対して百人くらいの男子と漫才みたいなやり取りをして  
いるのは気のせいと言つことにしておいて欲しい。こんな奴らと漫  
才したくないし。

別に好きで璃桜と付き合つても無いのに、忌々しいと言われる筋  
合いは無い。

「付き合つてんのは事実だろ？が！」

「それは認めてるぞ！？」

「じゃあ我らの女神の璃桜様を帰さんかい！」

「璃桜が何時の間にお前らの物になつているんだよー。と言つた努  
力しろ、お前！」

「んな奴らとこんなシユールなやり取りをする俺が恥ずかしい。」

「それをしてもそんな機会無いのはどうこうことだー。」

「お前らの押しが足りないんだよ、もっと押してみたらいつだー。」  
「でも璃桜様は振り向いてくれないんだけどー?」

「無理な時は無理だよ、諦める」

本当に璃桜を俺から取り返そうとしているっぽいけど、どうせ無理なのは分かってる。仮に取り返しても結果は見えてるよ。  
俺の昼休みはコイツらとのやり取りで半分が潰されるだろ?ね。  
全く、勘弁して欲しいぜ。

## 第十一話 人間は本能で恋をする

【第十一話 人間は本能で恋をする】

目の前には100人以上のおぞましき敵、俗に雑魚敵と呼ばれても可笑しくない璃桜を追いかけ回すストーカー軍団が石像よろしく立っている。

「オイツらは璃桜に俺という人がいると知っているのに未だに狙つてくると言つ、ストーカー規制法も良いところであるバカ軍団なのだ。

どうせ裏の方では『我らの辞書に不可能と言つ文字はない!』と、ナポレオンのようなことでもほざいているのだろう。

この状況を早く切り抜けたいものだ、腹減つてゐるじジユースが冷たくなるし。

「お前らは他の女子を好きになつたりしねえのか?」

「いきなり何を聞くんだ?」

「とんでもねえストーカー軍団だけどさ、お前らの中にはイケメンもいるんだから、多少は好きつて言つてくれる女子もいるだろ?」

俺のクラスでも何人ほどかはイケメンがいるんだけど、ソイツらは璃桜と言う名の幸せの白い粉に近い物に依存してしまいストーカーと化した訳。

あ、因みに幸せの白い粉なんてダメ。ゼッタイ。取り敢えず言つておこうか。

そんな奴らも中学校に少なからずモテていたらしく、彼女がいたりもしたらしい。

ただ、今はこんな有様だけどな。

「どう思つ?」

「そうか、それを考えたことは無かつた!」

「根本的にダメ人間かお前ら!」

開き直つた訳ではあるまい。石像よろしく立つてゐるバカ軍団は呆気に取られた様子で猫の首に鈴を付ける方法を話し合つネズミのように話し合つてゐる。

「イシラの頭の為に、もし良ければ今度俺の行きつけの病院の脳外科を紹介してやろう。あの脳外科の先生は賢い大学の医学部を出でているからな。

何かダメに効く薬でも処方してくれるんじや無いかな。

「一つ教えておこうか、人間諦めも大切だぜ?」

「恋してしまつたら諦めも何も無いだろうが、分かつてゐのか!?」

「恋愛なんて諦めてこそだと思つのだが?」

何だよこの青春ドラマ。俺の言つてることなんてそつくりそのまま青春ドラマに出てくる先生か誰かの言葉じやねえかよ。

「イシラの璃桜に対する気持ちは正しく難攻不落の砦である。ど

うにかしてバツキバキに崩す方法は無いのだろうか。  
と、悩んでいると地獄に迷い込んだ墮天使が。

「光輔君、何してるの？」

俺の前にいるヤツらにとつては天使だけど、俺にとつては疫病神  
と言う存在である璃桜を今は墮天使と呼ばせて貰おうか。

しかしこの状況は追試と全国模試がやつてきた状況よりも精神的に  
追い込まれる状況だ。

……まさか、ストーカー軍団はストライキを起こす労働者のように、  
俺に激昂してくるんじゃないのか？

「今こそ……我らの神様が見えたんだ……取り戻す時は来た！」

「おーっ！」

革命を起こすレジスタンスの如く一致団結しやがったぞ！ 俺は  
絶対王政をしていた訳でも無いのにギロチンで首を切られるのか！？  
いや、それよりも俺はコイツらに一泡吹かせられる必殺技を思い  
ついた。

「おい璃桜、急いでこっち来てくれないか？」

「あっ、うん……」

状況が把握できていない璃桜。十分間も正座した後に歩こうとす

る人のような歩き方で俺の元へと歩いてきた。

目の前では蛇睨みにも引けを取らない視線を送つてくるストーカー軍団がいるのだが、璃桜がいる時点で俺に手を出せる訳がない。この場において璃桜は俺のA・T・フィーメドとなってくれている訳だ。

「オイ、ストーカー軍団、よく聞けや」

うーわ、蛇睨みが何かグレードアップして来た。アイツらの目から体を貫通しないレーザー光線を放たれているようだ。

そんな中、俺は璃桜の肩を抱きながら、俺の顔を璃桜の顔へと近づけて、

「璃桜は俺の女だ、断じて貴様らには渡さんからな

どや顔と言うに相応しい、勝ち誇った顔をして言つてやつた。

目の前のストーカー軍団は一瞬氷結したかのように固まって、そのまま倒れる者やら泡を吹いて失神する者、立つたまま固まっている者へと変身した。

はい、これで一件落着。

「さて、ありがとう璃桜、行こうか

「……」

見れば璃桜はリンクのように顔を真っ赤にして茫然と立ち尽くしている。何かショックなことでもあつたんだろうか。

目の前の失神した軍団を見て啞然としているのだろうか、それは分からぬ。

「行くぞ？ 大丈夫か、璃桜？」

「えつ！？ あ……うん、ごめんね」

「何処で飯でも食う？」

「そうだね……皆に見つからない所が良いかな……」

喋り方も覚束無くなつていたし、璃桜は心にポツカリと穴が開いたような気分をしていたのだろうけど、今はその理由を知る由も無かつた。

\*

『では、運動会午後の部をスタートします、次の種目の男女混合リレーに参加する選手はゲートへ集合して下さい』

現在の種目は大縄跳び。クラスの半分が参加する種目なのだが、男女混合リレーに出された俺は呆気なく諦めることとなつた。こちらもクラスの奴らの計画によつて璃桜と一緒に。どうせ実行を企てたヤツは『計画通り！』だなんて叫んでいるんだろ。

」のリレーは全学年全クラスと勝負すると言つ一大リレーで、各学年での予選と決勝に分けられていて優勝への大逆転にも繋がる種目。

さらに運動会の中では一番の見物となる競技で、最強の三年生組と中堅の二年生組とダークホースの一年生組の勝負は白熱した戦いとなるのである。

「さてと、誰が出るんだっけ？」

「俺と委員長と、あと一人はまだ来てないな」

あと一人はそれなりに足が速いと言う噂の人。陸上部に所属していて、中学校の時はソフトボール部とかで県選抜のメンバーだったとか。

確かに、名前は高篠さんだっけ？ うん、そんな名前。バリバリのスポーツ系だつて。聞いた話、悠里の先輩にあたる人だつて。

身体能力の高さ故体力テストはオール10と言う最強の成績。

「お待たせ、ごめんね、待つたー？」

「あ、来た来た、高篠さん」

短く切られた髪に、本当に若干だけ口に焼けた肌。いかにも体操服の似合つその女子こそが高篠さんだつたのである。

さて、決勝へと出る為の作戦会議へ。

「取り敢えず奇数の走者は女子だから、まずは高篠さんに差をつけ  
て貰うか」

「オッケー、分かった」

「それで光輔が走れば丁度良いかな」

「璃桜が走つて、お前がぶつちぎつて走つて終わり、つて訳だな？」

「そう言つことだな」

潤平は陸上部なだけあつて結構速い。翔鳳高校において最速の部活は野球部と言われているのだが、野球部で一番速い奴とハリの速さである。

璃桜も意外と速いらしく、中学校の時はバレー部だったとかで運動神経も良い方らしい。

まあ悪くは無いチームみたいだが、問題があるとすれば俺。結構速い奴らの中で一番遅いのが俺である上に高校では部活と言ひ部活に入つていないので。

中学校の時はバスケ部だったから意外と速かつたんだが、このチームのイレギュラー因子は俺と言つべきだろつか。

「予選はブロックごとの一位が決勝に行ける筈だから、まずは予選通過だな」

「私達なら勝てる筈」

何か燃え上がりてきてているのだが、熱血さがハイに達して、潤平が『もっと熱くなれよー』とか言い出さないことを俺は願つておこう。

俺と璃桜は乗り気では無かつたのだが、さつきから璃桜は俺を見

ては顔をリングのように赤くしている。  
さて、全クラスの全面戦争とも言つべき男女混合リレー、スター  
ト。

## 第十一話 無茶な」とすると仇になるや

【第十一話 無茶な」とすると仇になるや】

『ルール説明、このリレーは各学年二つのブロックで戦いブロックの一位が決勝へ行けます』

放送部のアルトボイスがマイクを伝わって放送されてくる。

各学年、二つのブロックに別れて戦いその一位が決勝で総当たりつて訳だな。各ブロックでは不平が内容に平均的な速さで分けられていふと言つ。

一人200m走るらしく、極端に速い奴が居た方が勝ちやすいらしい。得意な教科があれば勝てる大学入試の一次試験とメカニズムは一緒だと思つてくれ。

「さて、第一走は私ね

「頼むぜ、大和撫子」

大和撫子こと高篠さんは足首をぐるぐる回しながら俺らの走る一レーンへと向かつていつた。あんな華奢な体をしていのに俊足だなんて想像もできないギャップだ。

悠里のいるソフトボール部ではかつてセンターを守つていたらしく、守備範囲は外野全範囲と言つても過言ではないチート選手だつ

たらしい。

そんな選手は野球選手の育成ゲームでもチートで出せないぞ。

『では此処で、電子掲示板に何レーンでどのクラスが走るかを表示します』

電子掲示板では即座に画面が変わっていた。

まずは一年生の走る番だからか、一年の観客席が国民的アイドルを出したかの如く、歓声と興奮で沸き立っていた。  
いやあ緊張するね、インターハイのリレーもこんな感じなんだろ

うか。

「じゃあ光輔、取り敢えずイージーミスはしないようにな

「分かつてらあ、これでも中学校の時は運動会の選抜リレーに出たんだぜ？」

この年になつてリレーさえも分からないと叫う奴は記憶喪失かよ  
ほど保体が嫌いで保体の時間になれば氣絶ばっかりしてたつて言う  
ような奴だけだろう。

そんな奴がいればまずはハンマーを持つてきて頭をブッ叩いてや  
るけど。無くしてしまつた記憶を取り戻させてやつ。

『ではリレーの準備が出来たよつのでスタートしたいと思ひます』

勝負を告げるピストルを構えて朝礼台に立っている生徒会役員に一瞬目を移し、俺は高篠さんへと目を追いやった。

……高篠さんの目がマジになつていてる。断食を終えて獲物を目の前にしたライオンみたいだ。

『よーい、スタートー!』

ピストルの音が空へと劈くと観客席からは興奮を隠せずに歓声が上がりだし、レーンの上に立つ四人の女子がスタートを切つた。四人の中で一番速いのはやはり高篠さんだった。一次関数のようないくつかの速さの一乗は進む距離に比例して、どんどんと加速。他の女子とは圧倒的な差を付け、勝ち誇った王者の顔で走つていった。

俺は、この大差があれば安心して走れると安堵した。  
もうちょっとでバトンパスだな、と俺は走る準備をしようとしたのだが、

「バトンパスするから水村君、走つて! 速く!」

ちよつと待つて下さい、まだ30mくらい俺と高篠さんには距離がありますよ? 速すぎませんか?

と言つて、高篠さんと並んで走つた俺は、彼女の洞察力に狂いは無かつた。

走り出した俺は前へ前へと進んでいき、テイクオーバーゾーンを超えそうになつたギリギリの所で丁度バトンパス完了。

「これも高篠さんのが速さがあつてこそ成り立つた荒技なんだね。」

「よし、俺はこの差をつまく使って走るだけか」

リレーは一瞬の氣のゆるみが勝敗へと繋がるから氣は抜かずに行こう。

流れは順調で、そのままバトンパスまで行けば良いんだけど、次の走者は璃桜だった。

此処で問題が発生。

「璃桜、バトンパス行くぞ、走れ

「ほえっ！？」

素で驚いた表情の璃桜。鳩が豆鉄砲じゃなくて輪ゴムを発射されたような表情を浮かべてこっちに気付いた。顔を真っ赤にしたままで。

スタートが遅れたこの状況で俺は嫌な予感を察知していた。

さて、俺と璃桜の距離が縮まってきて、いよいよバトンパス……

と言つところなのだが。

不覚にバトンを落としてしまった。

「あつ……！」

「ヤバい、追いつかれる！」

咄嗟に声を上げる俺と璃桜。後ろを見ると一位を走っている奴らがホラー映画で主人公を追いかけるゾンビのように走ってきてバトンバスへと段階を踏んでいた。

慌てながらもバトンを拾った璃桜は、皿を割つてしまつたドジつ娘メイドのような顔をしながらも全力、いやそれ以上の力で走つていつた。

あれ、結構一位と二位の差が僅差になつてきたな。

『おつと、一位の1・6がバトンを落とすと言つハーピングにより二位と接戦です』

ちょっとと実況黙つてろ。璃桜の気分をこれ以上害するなら俺が許さんぞ。

必死で走つている璃桜だけど、やつぱり相当ダメージを負つたのかどうか分からぬが二位を走つていたクラスに抜かれてしまつた。前を走る女子は何の勝負に勝つたのか分からぬが何かに勝つたと言いたそうな、どや顔だつた。

「心配はない、こんな時に強いのが潤平だからな」

ぼそつと呟きながら、俺は勝敗を見届けにした。

一位のクラスがバトンバスをしてから、ちょっとと遅れて璃桜と潤平がバトンバス。

さてさて、ここからはアンカー対決。

「後は俺に任せとけっ！」

格好良くバトンを受け取った潤平は一、二回地面を蹴るかのよくなステップをすると文字通りロケットスタートを繰り出した。

疾風の如く加速していく潤平のその姿は正しく、光のようだウサイン・ボルトを彷彿とさせる走りをしていたのである。

今日の行進の時に俺に学級旗を持たせたのは許しておけ。

一位と二位の差は逃げるウサギとそれを追いかけるライオンのように詰められていき、潤平は余裕そうな走りで一位のクラスを追い抜いたのだった。

さて、このまま逃げ切れば俺らの勝ち。

「流石はアーツだな、陸上部のエースだ」

残り50m、潤平は余裕そうな走りを見せて走りきって天空へとガツツポーズをしながらゴールテープを切つたのである。

これで俺たちは決勝進出確定となつた。だが……。

「……光輔

「どうしたんだよ

「足、ロケットスタートでけよつと痛めちやつたみたいだから、お前アンカー走つてくれない？」

「はあ！？」

大問題が発生したのであつた。

俺がアンカーを走るだなんて砂漠を飲み水なしで歩くと言つ自殺行為に等しい。……やっぱりコイツは許せねえ、と俺は思うのであつた。

## 第十二話 奇跡なんて努力する奴が起らせるものだ

【第十二話 奇跡なんて努力する奴が起らせるものだ】

『一年生Aブロックの決勝進出は1・6です、Bブロックのクラスは準備して下れ』

退場しながら流れるアナウンスを聞いていて嬉しいのだが、俺は憤慨の気持ちも覚えた。チョコレートの中に唐辛子を入れられた気分だ。

俺の横で痛そうにしているダメな男子委員長のおかげでな。

「本当ゴメンな、決勝は取り敢えずアンカー頼んだから」

「お前……アンカーって凄く大切なポジションじゃねえのかよ?」

「いやいや、俺もケガはしてるけど差は開けてくるからさ」

反省の色が全く見えないダメ野郎だ。とこりで、反省の色つてどんな色なんだらう? 俺は小さい頃に母親に聞いたことがあるのだが、返答は言うまでもない。

俺がもし将軍だつたりしたのならば、こいつは無人島が何処かへ島流しにでもしているだろう。それか切腹を命じているか。

「まあ決勝に備えてテープelingでもしていくか」「おーおー、勝手にビーザ」

救護室へと向かうダメ野郎を軽くあしらつてから俺は憤慨する気持ちを何処にぶつけば良いんだろうと悩んだ。  
ただしアイシのおかげもあって今回決勝に進出できたんだから、その点は感謝するべき点なのかもしない。

そして、俺にはリレーの中で反省では心当たりがもう一つ。  
あのミスをしてしまった璃桜はどうなつていいのだろうか。俺はそれを聞きに璃桜の元へと向かうこととした。  
と言つても直ぐ近くにいるんだけどな。

「璃桜、リレーの」と気にしていいのか?

「…………うん」

「ちよつと聞きたいことがある、じつに来てくれ

枯れそうになつていいる花のような表情をしていいる璃桜は俺に田を合わせようとはしなかつた。申し訳ない気持ちでいっぱいなのかどうかは知らない。

しかし俺は一つ、謝らなくては行けないことがある。

「あのミスの原因は……俺だ」

「えつ~」

「顔が真っ赤だから分かったよ、お前は昼休みのあの一件で俺を見る度恥ずかしい気持ちになつていたんだろ?」

「……そう、あんなこと言われたの初めてだったから

普通に無理もない話だろ？

璃桜にとつては俺は『奴隸兼彼氏』ではあるが、俺はあの時、完璧に璃桜のことを『俺の女』と言つてしまつた。

普段の学校生活においてパシリの仕事をさせている俺にそんなこと言われてみれば、そんな気持ちになるのもおかしい訳がない筈だ。

あの場を切り抜けの為と言えど、突然あんなストーカー軍団の前で言われてみると恥ずかしいを通り越した何かを覚えるだろ？

「それについては謝罪する、『メン』

「もうこの件については構わないけど……同じような過ちは犯さない

「決勝は俺がアンカーだから、俺にしつかりバトンパスをしてくれ

「……うん、分かった」

恥ずかしいんだろうか、未だに目が合わせられない璃桜。

「……何なんだらうな、この気分は」

横で、璃桜がぼそつと呟いているのが聞こえたのだが、その言葉が何を暗示しているかは、今はまだ分からなかつた。

\*

さて場所は変わり今は予選を観客席で見ているのだが、やはり二年生ともなると俺らとは別格の走りをしている気がする。一言で言うと全員が安定して速い。

俺らは一人が速くて二人が普通と言った所だが、二年生は全員が安定していてその中で速い先輩たちがいると言うに等しい。さらに野球部ともなれば潤平ばりの速さである。

そして二年生は未知の領域と言つても過言ではない。潤平や高篠さんより速いんじやないかと思われる先輩が十数人と言うのである。

「いや、これ、勝てると思つか?」

「でも光輔達の走りも良かつたよ、結構競るんじやないかな?」

「まあ……それだったら良いんだけどな……」

隣で居る佑斗は首をフクロウのようにして傾げたまま各ブロックの一番速いチームの分析を行っていた。一つ言えるところは、アンカーがやはり強いことだと呟つ。

「勝てると思うか?」

「でも神坂君が足を痛めて一走だからね、やっぱり前半が勝負の鍵かな」

何とも正論だ。と、そんなこんなでリレーの予選が終了し、決勝の前の前菜として玉入れが行われる時間となつた。

ちなみにこの玉入れは力ゴを持った生徒会の人が走り、その力ゴに玉を入れると言つドM・ドSの人にはたまらない競技なのである。ただし出れるのは女子限定だが。

『では男女混合リレー決勝に出るクラスは第一ゲートに集まつて下さい』

招集だ。では行つてくるとしよつ。  
アンカーと言つ一番荷の重い仕事を背負つて。

\*

『男女混合リレー決勝、一レーン1・6、二レーン……』

一レーンは再び俺ら。トラックの配置も本格的で学年のこと考  
えて一・一レーンは一年生となつてゐるのである。

高篠さんの目を見てみると再び燃えている。今度の目は自分より  
も強い獲物を探し求めて、ようやく見つけた戦いに飢える世界最強  
の人みたいな目をしてゐる。

そして半ズボンの下を見ると膝あたりにテープティングを巻いているダメ野郎の目もエヴァン×リオン初号機に乗った時の某パイロットと同じような目だった。

何だかんだ言ってあのダメ野郎も本気だな、と俺は改めて実感した。

『よーい、スタートつー!』

お決まりのピストル音が鳴り響く。それと同時に走り出した六クラス代表の一走。

その中でも一番に飛び出したのは高篠さんだつた。が、予選の時は状況が違い後ろから他の五人が獲物を仕留めようとするチーチーのよう走つてきている。

流石の高篠さんにもちょっと焦りが出ていた。

そのまま順位と走者間の差は停滞していく、第二走者へとバトンタッチ。

第一走者はそこまで速い人を置いていないのか、あのダメ野郎は再び差をこじ開けようとするかのように独走を始めた。

「……さて、次は璃桜か。一走が速かつたから三走はそうでも無いかもな」

ダメ野郎改め潤平は先程からダメ野郎と呼ばれている分を取り戻す働きをしてから璃桜へとバトンタッチした。璃桜も死ぬ気で走つ

ているだろう。

首位独占で走っていたが、そう言つ訳にも行かず三年生の中でも最強と言われるクラスが一位へ躍り出ようとしていた。

が、璃桜はどりにか逃げ切り、俺へのバトンパスへと移ろいつしている。

ただし、此処での過ちをする訳には行かない。璃桜は俺の顔を見れないのか俯いてチーターから必死で逃げる小動物のように走っていた。

「璃桜、来い！ 心配するな、俺を見てバトンを渡すんだ」

「……！」

俯いていた璃桜だが、俺の声に反応したのか意氣揚々とした顔で俺を見てバトンを力強く渡した。

さてと、後は俺が逃げ切るのみ……と思つてみると、

『決勝はアンカーは特別ルールによりトラックを一周走つて貰います』

「そんなルール聞いてねええええっ！」

いや、聞いてないんじやない、俺がプログラムに載つているルールを見るのを忘れていただけだ。トラック一周は400m。そうともなれば体力勝負である。

ケガを引きずつて200m走るなんて造作も無かつた筈の潤平がアンカーを降りたのはこのせいか。400mもケガと言う爆弾かか

えて走つてたら爆発するだらつよ。

100mくらいを走つた所で体力がちょっとヤバくなつてきた。しかも後ろから来るのは潤平くらいの速さで走つてくる三年生。まだまだ距離があると言つても何れは詰められるだらつ。と、一瞬諦めかけたその時だつた。

「水村ー！ 謹めるなー！」

「頑張れー！ 優勝をつかみ取ろうぜー！」

「一年坊のくせに頑張つてゐるじやねえか！ 奇跡を見せてくれー！」

と、声援が聞こえてきた。見れば観客席の所を走つてゐるのである。これほど声援を暖かいものだと感じた瞬間は15年間の中で無かつただらう。

周りの化け物に比べれば俺は確かに一番人間的かもしれない。でも、そこからの下克上と言うのもあるかも知れないだらつ。

面白えな、見せてやろつじや ねえの、奇跡とやらを。

俺は限界、いやそれ以上を超えた所までの力を出した。エネルギーの使いすぎでぶつ倒れても良いと決意した。もう一度、とある奴の笑顔も見たいからな。

「光輔君、頑張つてーー！」

色々な声援が飛び交う中で聞き覚えのある声。璃桜の声である。勝つんだ、と決意した俺は本気で走つた。何の為なんだろうと聞

かれるが、そんなのに理由は無い。まあ厳密に言つと有るんだけど。

体力も僅かになつてきただが、ゴールテープが見えてきた。が、後ろから走つてくる三年生に俺は気付かなかつた。気付いたのはゴール直前になつてからだつたのである。

微妙な差でゴールをした俺と三年生。勿論勝敗は実況か生徒会の人で判断だらう。

『今のゴールは1 - 6が先でした、よつて優勝は1 - 6です』

障害物リレーも同じような感じだつたかもしれないのだが、俺は数秒前に奇跡を起こした。見たかよ、俺の雄志を。

観客席から起こる今までに聞いたこともないような歓声を聞きつつ、奇跡を起こしたことを喜びながら俺の意識はブラックアウトした。

## 第十四話 部活動対抗でリレーすると大体勝つのは野球部か陸上部

【第十四話 部活動対抗でリレーすると大体勝つのは野球部か陸上部】

あれ、何でだろう、さっきまでトラックの上で歓声を受けていたと言うのに今は人が周りにいないかのように静かで、目の前には何処かの天井が。

いきなり神様から超能力者に命じられてテレポートを覚えてしまったのかな。

うわあ、足が何か動かない上に背中から下半身にかけて麻痺したみたいになつてやがる。

「どうか、俺はリレーで優勝して倒れたんだっけ」

今、全てを思い出したぞ。記憶喪失の人みたいな一言だが、俺は事態が飲み込めなかつただけだ。決して記憶喪失とかでは無いからな。

しかし先生は何処かに出ているらしく、救護室は俺一人だけ。不便なことはとすると、下半身全体が縄で縛られていたかのように筋肉痛で体が動かないことだ。

このままナイフでも持った人が来たら俺は助けを求めながら死んでいくことになるぞ。

「失礼します、水村君いますか？」

ガチャリとドアを開けながら聞こえてくる女子の声。その声には聞き覚えがあり、俺は考えるまでも無く誰が来たのかが分かった。璃桜だ。

何を話に来たんだろうか。

「お疲れ様、光輔君」

「おお、璃桜か」

「倒れた後だけど大騒ぎだつたんだよ、歓声が一瞬にして止まつたし」

「それは知らんな」

璃桜の話では俺は倒れた後、数十秒息をしていなかつたらしく心臓マッサージをした所で息を吹き返したらしい。

歓声が止まつた後、心臓マッサージ中は観客席が『帰つて来ーい！』と叫んでいたそうだ。

何処のコント集団だ。

息を吹き返した後、担架で俺は救護室へと連行されていったと言う。

もう今は部活動対抗リレーのアピール部門の真っ直中らしく、ふと耳をすますと吹奏楽部が演奏しているのが聞こえてきた。

因みにこの部活動対抗リレーは最後に行われる競技で、アピール部門とガチ勝負の部門がある。

アピール部門はリレーとは無縁の、部活動紹介に近い部門だが、ガチ部門は出る人全員が豹変したかのように目の色を変えて勝負をすると言つ。

「リレー勝てて良かったなあ、優勝をつかみ取れたと思つ?」

「いや、分からぬけど優勝の発表は閉会式で行われるんだって」

「一つ聞きたいんだけど、先生は?」

保健の先生くらい居るはずだろ。息してなかつた俺がいるんだから先生も俺をほつたらかして何処かに行つてしまつだなんて見殺しも良いところだ。

璃桜が金で買収したなんて訳は無いだろ。

「私が救護室の前に来たら偶然であつたんだけど、『いよいよくりーつて言つて何処かに行つちゃつたのよ』

「あの先生頭でも打つたのか!?」

まず先生でさえ俺と璃桜の関係を知つてゐるのが驚きだけど、その対応はいくらなんでも無いと思つぞ。そんな先生は保健の先生辞めちまえ。

しかし俺と璃桜で一人つきりなのはマズくないのか? 誰かに見られたら困るぞ。

「あのね、光輔君」

「おう、どうしたんだ」

「一つだけ言いたいことがあるんだけど」

何かのフラグが立つた気がするぞ。一週間前もこんな感じでフラグが立つたのを覚えているのだが。何処かのギャルゲーばりの展開だ。

もう俺は驚かないぞ。どんな展開が来てどのようなルートを歩むことになろうとも構わん。

「私と光輔君が付き合う切欠になつた言葉は『私の奴隸になれ』だつたよね？」

「まあそうだつたよな」

思い出したくもない忌々しいミスを犯した日ではあるのだが、振り返れば俺の人生はあの日から大きく変化することとなってしまった。

あの時に女子の実行委員に残らせておけば俺は今頃普通の高校生として彼女を欲しがっていたのかも知れない。

璃桜とは無縁の人生を送っていたかも知れない。

今、よく考えてみるよ。そう言う人生と、今の人生、どっちが楽しいんだろうか、と。

それを考える暇もなく、璃桜は次の言葉を紡いだ。

「それについては謝らせて、ごめんね」

「……何で？」

「そして、その言葉を訂正する

ちょっと待て。訂正つて……まさか璃桜は俺との関係を断ち切りたいと言つのか？

ふと振り返れば、まだ知り合つて間もないけれど一緒に昼飯食べた昼休みだって波乱のゴールデンウィークだって楽しかった。

今日の体育祭なんてストーカー軍団とかも出て来たけれど、それもちょっととした一つのスリルであつて凄く嫌とかそんなのでは無かつたと思う。

そんなのは嫌だぞ、璃桜と関係を断ち切るなんて。

でも俺が嫌なことを主張するのは、璃桜の言葉を聞いてからだ。

「私と……付き合つて下さい」

その言葉は俺の想像を絶して、頭のなかで一周してから訳が解らなくなつた。

言葉の意味からして、関係は断ち切らない筈だ。でも、璃桜の言葉は……付き合つてくれ？ これは普通に告白と取つても良いんだろうか？

驚きのあまり、雷にでも打たれたような衝撃が体を一瞬で駆け巡つた。

待て、俺、冷静になれ冷静になれ冷静に。これはきっと告白だ。だから俺はそれを受け入れるべきなんだ、璃桜との関係を断ち切りたくないならば。

「うん、じゃあ、『じめい』を宣しく

俺の返答はこれだけだったが、実際のところ俺の心の中ではこれで良かつたんだよな、と何度も自問自答を繰り返していた。その返答に対しても璃桜は、天使のような笑顔をこちらに浮かべて。

「ありがとう、これからも宜しくね、光輔君」

\*

救護室ではそのまま何をすれば良いか分からずに気まずい空気が流れている、俺は頭が再び狂った末部活動対抗リレーのガチ部門を見ていた。

優勝は結局野球部と陸上部が争って野球部だつたけどな。大抵の部活動対抗リレーなんてそんな物であると言つことは分かってるさ。

『では、閉会式を始めます、まずは優勝クラスの発表』

確か優勝クラスは男子部門と女子部門、そして総合部門での発表

をして、各学年で一人ずつMVPを表彰して終り、と言つ流れで進行するらしい。

総合とまでは行かなくても、何処かの部門に入つていれば良いんだけどなあ。

『では優勝クラス、男子部門3年2組、女子部門2年5組、総合部門……』

うーわ、緊張する上に男子部門も女子部門も入つていなかつたぞ。総合は多分無理なんぢやないかな、三年生は本当に気合いで入つていたし、騎馬戦とかリレー以外の競技で悉く負けたし。

このまま勝てるなんてアリとゾウの勝負でアリが勝つに等しい。

『1年6組』

……ああ。勝つたんだね、勝つたのか。まさかあの崩壊しかけていた障害物リレーと男女混合リレーだけで勝てちゃうなんて。

しかも俺の近くでは喜びのシャウトが飛び交つてゐる。この総合部門の優勝を考えるとダークホースとは俺らのことだったのかもしれない。

中には嬉しそうで泣いている女子までいるが。

『では、MVPの発表をします』

前の方でクラスのプラカードを右手に持っている璃桜も泣いていたことに気付いた。何故か嫌われている俺が優勝に貢献できたと思うと嬉しいなあ。

どうせ俺はMVPでは無いだろう、と思つてMVPを聞く「」としたが

『一年生、1・6の水村君、一年生……』

あれ、幻聴が聞こえているのかなあ、俺の名前を呼ばれた気がしたんだけど。それとも耳の掃除が足りないんだろうか、今度血が出るまで耳を掃除しようつと。

もし本当に幻聴であるとすれば俺は耳鼻科に5回以上通つても構わないぞ。やっぱりリレーで無茶したのが響いているのかな。

『では、今呼ばれたクラスの代表者とMVPの人は前へどうぞ』

「水村君、行つてきなよ、名前呼ばれたでしょ？」

「……呼ばれたの？」

「そうだよ、水村君はリレーの決勝でヒーローになつたからね」

幻聴では無かつたみたいだ。行つてくるとじようか。

「おつ、MVPおめでとう、ヒーローさんよ」

「俺はぶつちやけお前か高篠さんがMVPだと思つていたぞ?」

「いや、俺は所詮足を怪我したにすぎないからな」

「よく分かつてゐるじやねえの」

表彰をしている校長こはまに聞こえないように小さく声で話をする俺と潤平。

今考えてみれば、いつやつて前に立てていることが嬉しくて心臓がいきなり止まつてもおかしく無いかもしれない。

「表彰、総合部門1年6組……」

1・6の表彰も終わり、その後の表彰に関しては省略するが、かくして表彰は終了。

開会式の短い話とは違つ、長々しい校長の話を聞き流してから俺たちは最後の放送が流れてくるのを余韻に浸りながら聞くこととなつた。

『以上で、体育祭ならびに閉会式を終わります』

翔鳳高校体育祭、これにて終了。

## 第十五話 テストなんてこの世から滅んでしまえ

【第十五話 テストなんてこの世から滅んでしまえ】

体育祭を終えて一ヶ月後に控えるテストと言う物があるのだが、俺はそんなもの知らないので『何ソレ、美味しいの?』と何処かの現実逃避をする人のようなことを抜かしていた。

このテストは勉強できる・できないをセパレートする、同和問題も真つ青な学力的差別を行う、この世から排除されるべきテストなのだ。

別名、学力テスト。あからさまに学力が云々とかになるじゃねえの。

え、何でそんな話をしているかつて?

俺はその日の前の真実を受け止めるべく、璃桜と放課後の教室にいるからだよ!

「はい、じゃあ光輔君、テスト見せて」

スピード違反を行つてしまつた時の警察の検問よりも酷い璃桜のテスト検問。因みに学力テストは欠点こそは無いけれど大学入試の参考にさせられるらしい。

この検問で出すべきテストは運動会後にあつた、中間テストである。

そうだ、今のうちに補足しておこう。

俺の学校では理科と社会は選択制で、文系・理系どちらを選んでも良いように一年の時、社会は倫理・政経・日本史・地理・世界史のどれかを選ぶのだ。

そして理科は化学・生物・地学のどれかから選択。ただ、物理は理系に行つたとき一年で完全にやりきれるらしいぞ。

俺はもう文系に行くと決めているので、社会は日本史、理科は何を血迷ったか化学を選択。

しかしあま俺の前にいる璃桜はアニメに出てくるキャラのようだ顔を引きつらせて俺のテストを見ているのだが。

「……光輔君、国語も数学も何でこんなに悪いの？」

「ん？ あー、苦手」

「いや、勉強はしたのかな？」

「全然ですが」

「」のことがから繋せるとは思うが俺は面倒臭いことはやらないと言ふ、良く言えば自由奔放だが悪く言えばダメ野郎と言つべき性格である。

全部勉強しないという訳ではなく例外的な教科もあるんだけどね。

「あれ？ 英語良いじゃん」  
「英語は好きだったからなあ」  
「これだったら学力テストでもどうにかなるかもね」

これは喜ぶべきか悲しむべきか分からぬ何とも中立なセリフだな。俺は学力テストでどうにかなるくらいの成績なのか、それとも英語が良いと喜ぶべきなのか。

この判断は人それぞれだらうけど、俺はもつショックとしておこうか。俺の全盛期とも言つべき中学校の時は英語だけでは学年内で一、二を争う学力だつたんだけだな。

中学校の時は凄かつた人でも高校に行くと中学校の勉強なんて雀の涙みたいだとシャウトする人がいるんだけど、その典型的な例は俺だ。

「あとは……社会も理科も平均より上ね、これは勉強したら良くなれるかな？」

「璃桜のテストはどうなんだよ、見せてくれよ」

「ええ、良いわよ」

璃桜は中間テストは一番。定期テストはクラスで順位が決まるのだが、この人は一番の人と大差を付けて一番という天才の典型的な例を見せつけて一番だつたらしい。

俺の頭と璃桜の頭を入れ替えてみたいのだが、それを実現する機械と技術がこの世には無いので俺は仕方なく断念することとなつた。

「はい、テスト」

「おう」

俺のテストと璃桜のテストが帰ってきた。さて、璃桜のテストを……つて、マジかよ！？ な、何だつて、数学点数三桁だと！？ そしてその他のテストも凄すぎて気持ち悪いほどどの点数を獲得しており、才能が必要になる難しい現代文でさえ90点を超えているのである。

ただ者じゃねえぜ、この女。努力者で天才なのか、ナチュラルで天才なのか？

「どうしたの、お前、ガリ勉？」

「いや、勉強は結構やつてゐる田でも一日一時間くらい……だけど？」「えいやああああああつつ！」

何だこの女本当に俺らの思い描くよつた典型的な天才だああああつ！

こんな女が日本にいると思うと今後の日本の就職氷河期には明るい日差しが見えてくるだ。五年後は全世界が璃桜に注目している筈だ。

唯一俺が勝負できそうな英語ですら圧倒的に俺に勝つてやがる。

「大学、何処行くんだよ？」

「えーと、一流大学の……医学部かな？ それか留学とか、ね」

「ごめん、聞いた俺が間違っていた」

用は神様だつてことか。医学部とか本当にどこの神様だよ。最高峰の大学の医学部から推薦状が来ても可笑しくないレベルだぞ。さらに留学するとか何になるつもりだ。外国人にでもなろうと言

うのか、恐ろしいな。

「取り敢えず、英語が良いつて事は暗記は得意つて訳ね」「勉強に力を注ぐ科目は古典と数学ですか」「そうね」

それから一週間、俺は璃桜先生といつチート先生と共に勉強することとなつた。

時計を見てみると戌の時を回つていた、と言つてもザザリではあつたのだが、そこらへんはもう思い出すのもおぞましいのが多くは語らないこととしよう。

「助動詞のべしはね、『すいかとめて』って覚えるらしいのよ?」

「推量、意志、可能、当然、命令、適当……あー、もうイヤだあ」

「」のよつた日々が何日続いたかどうか分からぬのだが、俺にとっては血の池地獄に浮いてるくらいキツかつた試練だと思った。古典と数学はとにかくやらされて、『あなたの後ろに古典と数学がいるかもしません……』とどこかのB級ホラー番組のシメのよくな言葉が聞こえてきた。

ギャルゲーではよくありがちな展開だが、俺はこの展開はイヤだと心底拒否していた。

さて、テスト当日。

俺のナツツのように入スカスカだつた頭は砲丸の中身のようになに物で詰まつてゐる。二次関数の平方完成とか、古典助動詞とか、英語の強調構文など。

頭の中の記憶をした知識などは風船の如く破裂しても可笑しくない状態となつてゐるのだ。

「あへ、一時間目は……国語かあ」

才能が全ての現代文はパスしても良いから古典は点数取つてこいと言われたので、俺は古典だけで勝負することとした。

古典と漢文は英語に似通つてゐるから英語ができたら双方ともどうにかなると言つてソーネモ通説は本当だつた。科学的にも俺が証明済みだ。

「で、一時間目は数学、二時間目は英語、か

英語は別に良いとしても、数学が問題らしい。途中過程が合つていればちょっとは点数をくれるらしいので安心はしておいたほうがいいらしいが。

ただ璃桜はどうせ満点とか取るんだろうな、俺の彼女ながらえげつない人だぜ。

「まあ、やつてやりますかな、テスト」

俺だつて勉強すればできる」とを証明してやるぜ、と決意した。

\*

一週間後、このテストは解答用紙と一緒に順位が帰つてくるのだが、それが今日返されるとは。

まあ自己採点してみても、有る程度は出来ていたからそんなに悪くはないだらう。

「さて、光輔君、結果は?」

「待て、お前は?」

「総合順位が一番だよ」

……この女はつづくづくどうしたことだらうか。一度捕まえて頭の中を研究してみたいものだ。天才とはどのよつたな脳をしているのか分かるだらう。

何か普通の人とは違つた脳味噌を持つていそつなのだが。

さりに他の教科も一桁は無く、最低順位も3番と言つ次元を超えた結果を残していた。

俺の結果に関しては、280人で順位が出るんだけど結構良かつたと言えば良かつたのかな？

古典 42 番、数学 73 番、数学 58 番、数学総合が 65 番、英語 22 番。ハツ、俺だつてやれば出来るんだからな。

しかし問題は現代文と国語総合。

「はい？ …… 現代文がビリから一一番田？」

「そうだよ、国語総合が 200 番だった」

「あ、そりなんだあ……」

茫然とした顔でこちらを見ている璃桜だが、総合はそれでも 72 番だったので許してはくれた。しかしその現代文の偏差値も酷かつた酷かつた。

ただ、現代文はもうどうにもならないんだろうと呆れられましたよ、何か？

そして六月末の生徒会選挙に向けた動きが始まることであった。

## 第十六話 選挙は民主主義には必須

【第十六話 選挙は民主主義には大切】

地獄のテスト終了後、一学期ももう僅かとなるので行われる選挙がある。それが生徒会役員改選選挙。別名を改選挙と言い、別段略も出来ていらない別名である。

一年と二年のクラスから各一名、生徒会立候補者と推薦者を出すのがこの選挙。しかし前者も後者もなつたら強制的に生徒会の自由役員をやらされるのだ。

これを知らずに推薦者となつた人はムンクの叫びばりの顔になることもあるらしい。

ま、俺はそれになつちゃつた訳ではあるけど。  
ここからはテスト終了後の話をしようと思つので聞いてくれると嬉しい。

\*

「じゃあ生徒会役員の立候補者、誰かいなか？ それが生徒会自

由役員でも良い

あれはロングホームルームのことだった。俺は自由気ままな高校生活を送りたいからそんなもんどうちでも良いよ、と流していた。しかし、次の瞬間の挙手により俺はどん底へのバンジージャンプを行わざるを得なくなつたのである。

「はい、私がやります」

手を挙げていた女は璃桜ではない。委員長は立候補できないと言うのを知っていたのだが、俺の身近で知っている女子だった。

その女子は実行委員の女子で、俺と一緒に実行委員になつてから何度かは話したことのある女子だったのだが、この時から既に嫌な予感はしていた。

「よし、じゃあ立候補者は決定だな、滝下で良いか？」  
「はい」

そいつの名前は滝下飛鳥。そいつの見た目、性格を共に一言で表現してやると、『ツンデレ』。もうツインテールにしても声にしてもツンデレ。

聞くと『ぐきゅうひゅうー!』と叫びたくなるような声優の声も真つ青のツンデレボイスなのだ。璃桜に次いで学年の男子を虜にする女子である。

クラスの方ではやる気なさそつた生返事で立候補者決定。

何故その女が生徒会へ立候補したんだろうか。

俺はそれが不思議でたまらんぜ。宇宙の外には何があるんだろう  
と言ひ疑問よりも不思議だ。

「推薦者はお前が指名しても良い、取り敢えず選べ」

「はい、分かりました」

担任の瀬木先生は余計な提案をしたせいでもあるのだが、次の瞬間で俺は地獄への道を一直線することとなつたのである。

「じゃあ、実行委員でも一緒に水村君、お願ひします  
「はい！？」

俺みたいな木偶の坊を呼ばなくとも良かつたのに俺を指名した滝下。まだ仲の良い女子とかいるだらうし、最悪の場合先生に指名されれば良かつただろう。

何故に俺を指名した？

「うん、じゃあ決まりだな」

「先生！ 異論があります！ 何で俺なんですか！」

「決まってるじゃないか、滝下がお前を指名したからだよ

決まってるじゃないか、登山者はそこに山があるから登山をする

んだよ、と言う名台詞のように理由を話さないでください！？  
登山者と推薦者の決定を一緒に流して欲しくないのだが。

「うん、じゃあ仕方ない、多数決だ」

「少数意見の尊重しないんですか！？」

「クラスの皆の意見を聞こうか、水村で良いと思う人、手を挙げて」

はい、と言う男子のやる気なさげな声が響き渡り一斉に手が挙がった。その数、俺をのけて数えてみると全員。具体的な人数を言うと39人だった。

これじゃあ少数派意見も何も無いよな。

「じゃあお願ひな」

「……はい」

これがロングホームルームでの断末である。俺が地獄へとダイブを決めた瞬間でした。

\*

何とも面倒なことに立候補者と推薦者はポスターを作り各クラスで選挙活動を行い、生徒会室へ打ち合わせなどに行かなくてはなら

ない。ある。

俺はコンビニジユースを買わされに行くのとこの仕事では完全に前者の仕事の方が楽だなど嫌々ながら行つこととなつた。

勿論遊び暇なんて無く、友達と帰りに道草食う為のゲーセンなんて行けなくなつた。中世の王宮からの禁止令よりもシライ弾圧だ。猫の手とかじやなくても良いから微生物の手でも借りたいモノだ。

「ちょっと、何してんの？ それそれやつなさいよ」

「はい、分かってますよ」

後ろからシンデレボイス。俺に課せられた労働はポスターの色塗り。美的センスは皆無なのに俺はアクリル絵の具を手にしている。ちなみに一枚描かなくてはならないので俺の横ではもう一枚のポスターの下絵を滝下が描いている。完全に漫画の書き方を参考にした感じだ。

コイツの描く絵はマジモノで深夜アニメにも負けないような絵なのである。

「滝下、お前や、絵上手だよね、何処で練習したの？」

「アンタには関係ないでしょ！？」

「……はい、申し訳ないです」

「全く、分かれば良いんだからつ」

会話もこんな感じなのか。シンデレラて恐ろしいね。もし世界中の人人がシンデレラに目覚めるようなことがあれば「ミニミニケーション

が途切れちゃうね。

俺は仕方なくせっせと色塗りに励むこととなつたのだ。

「はい、一枚目も終わったわよ、色塗りお願ひね」

「はいはい、分かつてます」

「それなら宜しい」

ガタンと席を立つた滝下。お前も下絵終わったのなら色塗りくら  
いやつてくれよ、と言いたいのだが俺にそんな権利は無く蟬の一生  
くらい儂いので何とも言わないこととする。

不器用に名前の所とクラスの所を塗つていた俺は滝下が何処かに  
行つてることに気が付いた。しかし荷物はあるので帰つた訳で無い  
ことが分かつた。

どうせトイレだらう、ヒスルーしていたが、

「はい、今日のバイト代」

「ん？ あ、ありがとう」

「べ……別にあんたのためじゃないんだからねー！」

頬を赤くする滝下。俺の一次元に一応興味があるから分かるんだ  
けど、この女は典型的なツンデレだ。どこのB級深夜アニメに出  
て来そうな。

色塗りを終わらせた俺はバイト代として俺の机の上に置かれた炭  
酸飲料を啜りながら椅子に深くもたれかかり、時計に目をやつた。  
うわー、五時半かあ、家帰つてパソコンする時間が無くなつた。

「うん、じゃあこれ出来たから渡しておくれよ」

「分かったわよ」

「じゃあ俺家に帰るよ」

「明日も、良かつたらお願ひね」

「どうした?」

「いや、何でもないわよ」

いつも怒っているかのようなシンデレボイスを俺は聞きながら荷物をまとめて教室を後にした。

何で俺を推薦者に選んだんだろうか。正直な話、それだけが分からぬ。理系に行けば習う数三・数四くらい分からないと言つても良いはず。

紙パックのいちじオレを教室で一人啜つている滝下の頬杖をついた後ろ姿は何故だろうか、かなしそうに見えた。

## 第十七話 屋台のラーメンは一般的に言つて美味しい

【第十七話 屋台のラーメンは一般的に言つて美味しい】

はつきつ言おつか、俺は学校へ行きたい訳がないのである。

「おい、光輔最近お前顔色悪いぞ？」  
「悪いな、気にしてくれてるのか？」  
「友達がそんなのだとそりやあ俺も心配するだ

俺に話しかけたのは体育祭でダメ野郎と俊足の一足の草鞋を履いた男、潤平である。体育祭以来連むことが多くなった。

冒頭でいきなり引きこもり宣言してはしまつたが俺は学校に来てるだ。

ツンデレに何処かの労働者ばりに口キを使われるから嫌なだけであつて、学校が地獄になつたとかそんな訳ではない。

最近は英語の授業で「His boss made him work against his will.」と言つ文章を見て笑いが止まらなかつたことがあつたぜ。

「お前そつ言えば、滝下と早乙女で一戻してんのか？」

俺は先程買つてきて飲んでいるジュースをスプリンクラーの「」と噴水するところだつた。こんなことになるのは無理も無いだろう。いきなり恋愛関係の話とか止めてくれ。地球温暖化で日本が沈んでしまうくらい嫌だよ。

「それは無い、俺はアイツのことは嫌いだ」

「そうか、お前にも遂にモテ期が来たのかと思つてしまつたぞ」

「オイ、ちょっと待てや。俺にだつていつの日かモテ期は来るぞ。人間どんな人でも三回はあるらしいけどな」

「ちょっと良いかしら、光輔君」

「どうしたんだよ滝下」

噂をすれば何とやらだな。どうせこの女から『えられるモノなんてバイト代と労働だけだろう。いい加減ストライキでも起こしてみたいよ。

この女から逃げようとするなんての×太くんとジャ×アンが勝負することに等しい。用はね、見込みなんて無いんだつて事だ。

しかも逃げれば大監獄での拷問も真っ青な鉄拳制裁が待つている。

どうせ俺はストライキなんて起こせる訳も無く、階級に縛られた平民のように無力に命令を聞かされる儂い奴なのさ。

「今日はメモあるから、放送原稿でも考えて」「自分で考えろよ？」

「考えてみないよ、あんただつたら私からでは見えない視点で考えられるでしょ？」

成る程、確かに言われてみればそうだけど。ぶっちゃけ言つてしまえば自分が考えるのは嫌だからと言つ変な言い訳でしょ？どうせ反抗するなんて無理だから俺がやりますよ。

「分かったよ、授業中に内職でもして考えておく」「じゃあお願ひね」

「うう、内職って分かるかな？ 授業中に塾とかで覚えてこいつて言われた教科書とか見る奴いるけど、そう言う裏で他の勉強することね。

先生までもこの言葉知っているんだから驚きだった。

\*

学校終了後。俺は生徒会室へと立会演説の時に喋る内容を書いた放送原稿を提出ってきて、教室に戻りながら帰ろうかと思つていた所。

俺の家は親が共働きなんだけど今日は母さんが残業で帰るのが若干遅くなるから、メシは悠里と何処かで食べてこいとお金と書き置きがあった。

悠里は今朝ラーメンが食べたいと言つてたつけ。

「せーと、悠里にメールを送つておひつか

どうせアッシュは今日も部活だらう。最近はピッチャーをやつして全てのポジションは経験したとか言つた気がするな。あれこれしているうちに六時なのでもう部活も片づけをしている頃か。

と、思いながら教室を覗いてみると。

「……あれ、滝下、まだいたのか？」

「そんなの私の勝手じゃないのよ」

「そうだな、悪い」

俺の机を見ると今日のバイト代はパンだった。わざわざコンビニで買つてくれたのかどうか知らないがコンビニで売つてこられるようなパンだった。

そして当の滝下は何をしているかと見ると数学の参考書を開いている。

「なあ滝下」  
「どうしたのよ？」

「メシ、妹と食べに行くんだけど一緒に行かないか?」

何故だらうか、俺はあのツンデレは嫌いだったのに。悠里に一番紹介しづらい女だと俺は格付けしていたのに。メシと一緒に食いに行こうと誘つてしまつた。

「じゃあ私が満足できるような物じゃないとダメよつ」

日曜の朝になると放映されているプリティでキュアキュアなあのアニメでも聞くことの出来ないようなツンデレボイスが嬉しそうに聞こえた。

\*

「……兄さん、その人、誰?」

「生徒会選挙で一緒に仕事している人、滝下さん」

「宜しくね」

おお、猫力ブつてやがる。流石は生徒会立候補者だ。ツンデレボイスでこれほど性格が良さそうに見えるとか凄く大きなギャップだな。

そう言つて俺と悠里とツンデレは駅前の屋台のラーメン屋まで

来ている。

メールで連絡してから、先程落ち合つた訳だぜ。

「ちょっと生徒会選挙の話するから、悠里、ちょっと何か飲んでろ」

「何か頼んで良いの?」「

「良いよ、その間俺と滝下の話は聞くなよ」

しぶしぶと了解した悠里は携帯をイジりだしたので俺は心おきなくシンデレラと話が出来る。取り敢えず色々と聞こうか。

「ちょっと聞きたい」とあるんだが

「何よ

「お前って、学年成績一番だよな? 反抗するな、まともに答えるよ

こんなことを聞いたのは俺がバカだからでは無い。思惑くらいいるさ。

俺らの会話を聞けば直ぐに分かるはずだ。それでも分からぬのならば、それは現代文が全然出来ない奴か外国人かだろうな。

「ええ、その通り」

「お前は才能ではなく努力で成り上がった……違うか?」「

「違う訳は無い」

今日教室で勉強している理由と合致した。そうなれば努力だけで何故学年成績一番なんて言う人間辞めましたと言うような成績を取らうとするのかが分からん。

深い理由が何かがあるのかは分からぬのだが、取り敢えずそれも聞くことを視野に入れた。俺も分からぬけどもメシに誘つた理由はコレだったのか。

「俺だつたらまず努力だけでそんな成績は取らないけどな、何故だ？」

「……それは？」

躊躇い半分のシンデレは、信じられない事実を告げようとした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9050s/>

---

俺の彼女は委員長です。

2011年11月17日17時31分発行